平成17年度生涯学習振興奨励費補助事業（北海道教育委員会）

全道造形教育研究大会

2005. 7. 28　函館大会集録

HAKODATE

めざめる感性（こころ）きらめく個性（かたち）
～地域空間がいざなう造形活動のひろがり～

会場：北海道教育大学附属函館中学校　函館市芸術ホール

第55回
全道造形教育研究大会［函館大会］

めざめる感性（こころ）　きらめく個性（かたち）
～地域空間がいざなう造形活動のひろがり～

◇大会シンボルマーク制作　　上磯町立浜分小学校教諭　佐々木　善憲

第55回大会テーマ「めざめる感性（こころ）きらめく個性（かたち）」にもとづき，全体の形は，55の数字，ＨＡＫＯＤＡＴＥの文字を用いて，きらめく笑顔のやんちゃな子どもの顔をイメージした。また，函館の地域の特徴の風，青空，海，巴の港を色と形で表現し，２つの円の赤，緑は，それぞれ感性，個性を示している。

このマークに「地域空間がいざなう造形活動のひろがり」への想いを込め，大会に臨んでいる。

目　　次

函館大会集録発刊によせて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

大　会　日　程・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

大会スナップ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

研　究　概　要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

記　念　講　演・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

アートプロジェクト
　　「ハコデジアート探検隊」・・・・・・・・・・・・・・14

授業者・提言者・助言者・司会者・記録者一覧・・・・・・・20

分科会討議記録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22

大　会　速　報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60

新　聞　記　事・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・76

協賛をいただいた皆様・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・78

編　集　後　記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・79

◇表紙デザイン・・・・・・・・・佐々木　善憲（上磯町立浜分小学校）

函館大会集録発刊によせて

第５５回全道造形教育研究大会
函館大会実行委員長　**藤　川　　潔**

函館大会集録を発刊するにあたり，一言ごあいさつを申し上げます。平成１７年７月２８日，教育大学函館校附属学校園を会場として開催されました第５５回全道造形教育研究大会が，晴天に恵まれ無事成功裡に終了できましたことを心よりお礼申し上げます。

今大会は，美術教育の持つ役割の重要性を再確認し，時数削減による会員数の減少と言う現状を克服する願いをもって臨んだものです。造形という，太古の昔より人の生活の中から生まれてきた美しさの追究は，情操を豊かにし人格の完成に欠くべからざるものであるということを内外に向けて発信する機会として取り組んできました。このことを受けて，総務の鈴木秀明先生，事務局長の横岸澤英二先生，事務局次長の瀧本伸幸先生，小と中の研究部長柿崎雄二先生，木村伸二先生を中心として，研究テーマや授業作りに熱い討議を重ねてきました。更に大会運営全般にわたっては，総務で会場校の副校長でもある土谷敬先生に細部にわたるご配慮をいただきました。第５０回大会を成功させた五年前の経験がいかに大きな財産となってきたか，今大会の事務局次長と研究部長は，五年前の授業者でした。大会研究テーマに迫る授業を組み立て，地域を生かした題材を通して子どもたちの情操を豊かにするべく力を発揮してくださった授業者の方々，そして提言いただいた皆様には心からの感謝とお礼を申しあげます。こうして粛々と進められた大会を通して研究会の組織としての力を改めて実感しておりました。

また，道南の大会として渡島・檜山両研究会のお力添えで，提言に助言にとご協力をいただきましたことは大会成功の大きな要因となりました。更に，講演の講師を快く引受けてくださいました渡辺保史様には，「はこデジアート探検隊」のプロジェクトに企画立案から助言をいただき，児童生徒が地域を見詰める感性を磨く手助けをいただきました。そうした実践に裏打ちされたお話しは，参加者の大いなる刺激になったことと篤くお礼申し上げます。

大会開始にあたり，各授業に校長先生方が自校児童生徒の様子を見に会場にお越しいただいたこと，渡島教育局長西村守様が中学校の授業を熱心にご覧いただいたことなど，各方面から差し伸べられた温かい思い，ご支援を受けて無事開催できたものと心から感謝申し上げます。

最後になりましたが，この第５５回全道造形教育研究大会函館大会へご支援，ご助言いただきました北海道教育委員会，函館市教育委員会等関係機関団体並びに会場を提供いただいた北海道教育大学函館校附属学校園の皆様に，さらに各地よりご参会いただきました大勢の美術造形教育に携わり子どもの健やかな成長を願う皆様に，重ねて深い敬意と感謝を申し上げます，ありがとうございました。

大会日程

第55回
全道造形教育研究大会[函館大会]

□大会主題

北海道造形教育連盟研究主題
心豊かに未来に生きる造形教育

函館大会テーマ
めざめる感性（こころ）きらめく個性（かたち）

研究主題
地域空間がいざなう造形活動のひろがり

□日　　程

7月28日（木）

- ○　受付・開会式・全体会・講演・ネットワーク会議（北海道教育大学附属函館中学校）
- ○　公開授業・分科会（各授業会場）
- ○　函館・渡島・檜山児童生徒美術展（函館市芸術ホール）
- ○　レセプション・閉会式（五島軒本店）

8:30 9:00　9:45　10:15　11:00　12:30　13:30　16:00 18:00

受付	公開授業Ⅰ（幼・小） 公開授業Ⅱ（中）	開会式 全体会	講演	昼食	分科会 研究協議 ネットワーク会議	移動	レセプション 閉会式

9:15　10:05　14:30

□講　　演　演　題　「発見」と「共創」の学びをデザインする
～情報デザインが媒介する造形教育と地域コミュニティ～

講　師　渡　辺　保　史　氏

□主　　催　北海道造形教育連盟・函館市美術教育研究会

□主　　管　第５５回全道造形教育研究大会函館大会実行委員会

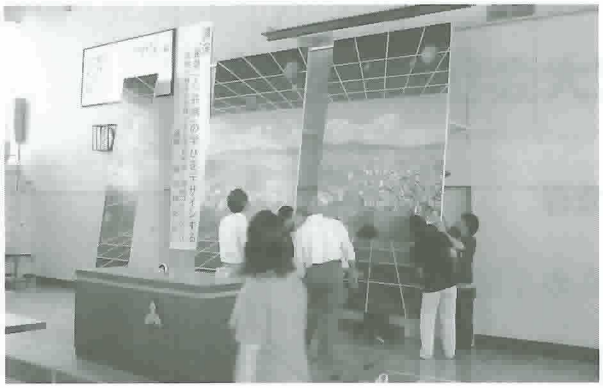
□共　　催　北海道教育大学附属函館学校園

□後　　援　北海道教育委員会・函館市教育委員会・渡島美術教育研究会
檜山造形教育研究会・函館市幼稚園協会
北海道特殊学校長会道南支部・北海道高等学校文化連盟
北海道教育大学函館校

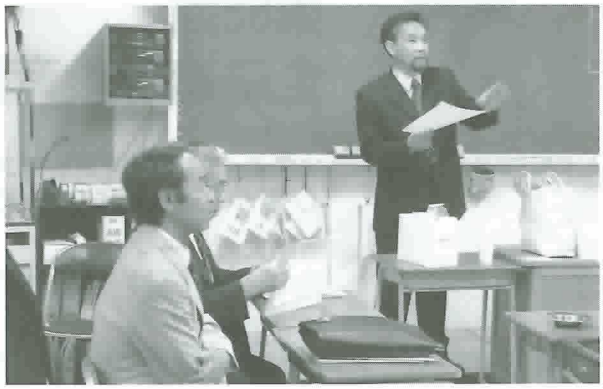
□会　　期　２００５年７月２８日（木）

□会　　場　北海道教育大学附属函館中学校・北海道教育大学附属函館小学校
北海道教育大学附属函館幼稚園・函館市芸術ホール

大会スナップ



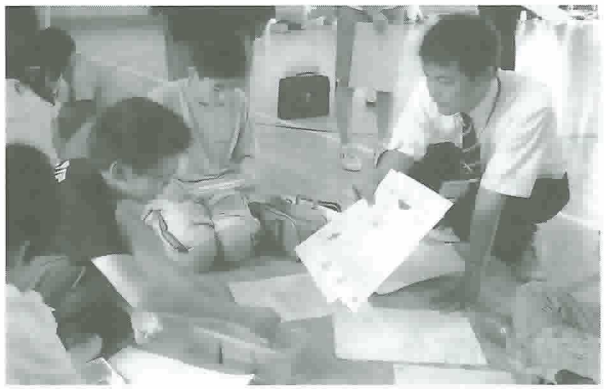
拘りのステージバック，参加者を唸らせるぞ！



いよいよ当日，最終確認！

受付開始！　道外も含め320名の参加

第１分科会　「うみだ！うみだ！」



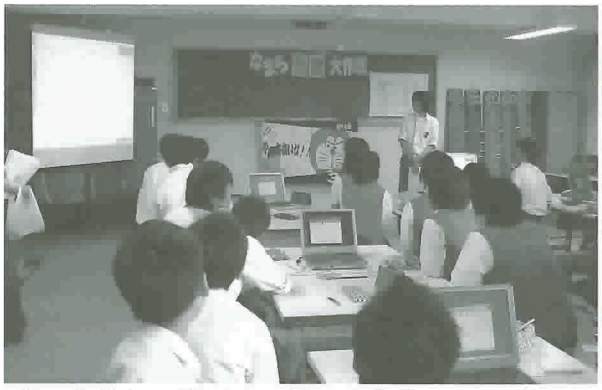
第２分科会　「私たち街づくりデザイナー」

第３分科会　「光と風のハーモニー」

第４分科会　「函館・元町・スローアーカイブス」

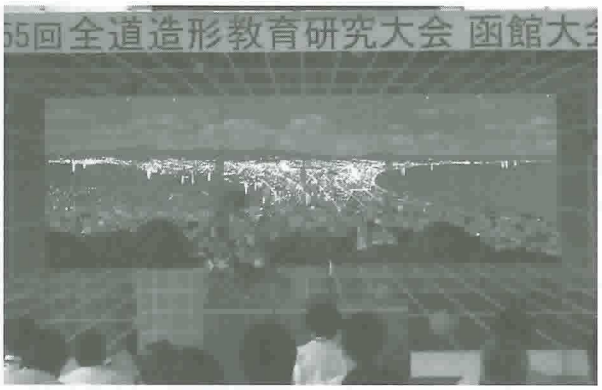
第５分科会　「田辺三重松に学ぶ」

大会スナップ



第６分科会　「なまら函館PR大作戦」

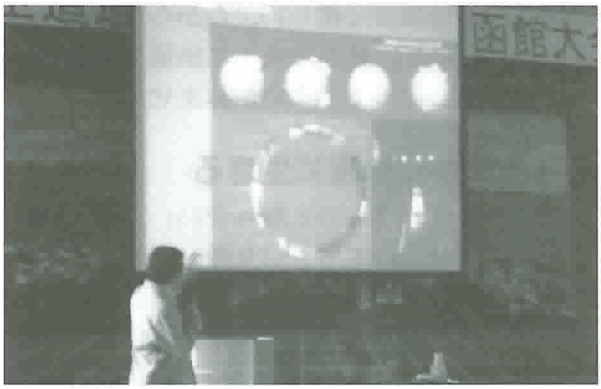
第７分科会　「縄文の灯」



開会式　夜景がきらめいた

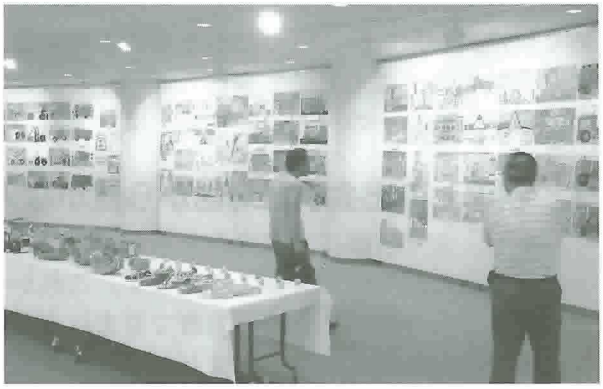
来賓各位

熱気あふれる開会式会場



記念講演・渡辺保史氏

初の全道ネットワーク部会の開催



児童・生徒作品展（芸術ホール）

研究概要

〔北海道造形教育連盟研究主題〕

『心豊かに未来に生きる造形教育』

函館大会　2005.7.28

北海道造形連盟研究部長　川　島　正　夫

1．はじめに

聖徳大学教授の遠藤友麗氏は，学校美術教育への「六つの疑問」として以下の疑問をのべています。

1．なぜ９年間も義務付けて学習させる必要があるのか？
選択教科やクラブ活動ではいけないのか，社会教育や自由時間で楽しむ機会があるのに，その後の生活や仕事に役立っているのか？
2．なぜ専門芸術家ではなく，教師が指導しなければならないのか？
3．なぜ「評価・評定」をつけなければならないのか？客観的な評価ができるのか？
4．なぜ「教科書」を使わないのか？（学習内容は個々の先生の好みでいいのか？）
5．「造形，工芸，デザイン」はものづくりであり，「技術家庭科」の中味とダブる。なぜ図画工作科，美術でやらなくてはならないのか？これらは技術家庭科に移行し，図画工作・美術は絵と彫刻だけにすべきではないか？
6．「豊かな心や情操，創造性」は本当に育っているのか？

これらの疑問は，かつて文部科学省初等教育局視学官として活躍された氏が周りの人々に投げかけられた疑問なのでしょう。私たちは，子ども達や保護者，社会の人々に日々の実践や研究，保護者会などの機会に説明していく必要性があります。もし，これらの疑問に明確に答えられないとすれば「図工・美術教育は難しい，わからない」という教科の曖昧さにつながることになります。我々だけがわかっていて，社会の人々に価値や意義が伝わらなければ，図工・美術教育は公教育で行わなくてもよいものになってしまいかねません。

2．心豊かに未来に生きる

造形教育は，「ものと触れ合い」「人と触れ合う」中で試行錯誤を重ねながら，「自分と向き合う」ことから，自分の未来を切り開いていくことのできる人間を育てていくものです。北海道造形教育連盟は，２０００年から研究主題を「心豊かに未来に生きる造形教育」と設定し，研究を重ねてきました。我々は，函館大会，全国大会（札幌会場），帯広・十勝大会，空知大会、旭川大会において＜豊かな自分づくり＞に向かうための造形教育のあり方を考えてきました。その中で見えてきたことは，つくりだす喜びを土台としながらも，「感性」を育むことによる「個性」のきらめき（際立ち）であったと考えられます。まさしく，今回の函館大会の大会テーマである「めざめる感性（こころ）きらめく個性（かたち）」につながるものと考えます。私たちは，「造形の教育」を通して「造形による教育」（心豊かに未来に生きる人間づくり）を考えてきたのです。この方向性は先に引用した遠藤氏の学校美術教育への「六つの疑問」に対する連盟の回答であるとも言えます。

3．状況との出会いと対話から豊かな人間づくりを

しかし，より明確に，説得力をもって外に向けて造形教育の価値や意義を発信していくためには，一歩踏み込んだ発信が必要と考えます。これからは，「どんな要素によって，豊かな情操や創造性がどのように育つのか？」造形教育で育まれたものが「どのように生活に生きていくのか？」「造形教育を中心にした新しい教育にはどのような可能性があるのか？」などを考えていきたいと思います。私たちが求める＜豊かさ＞は，子どもの活動の質の高まりに表れてくると考えます。

今回の函館大会では，＜ひと＞，＜もの＞，＜くらし＞といった自分を取り巻く状況との出会いや対話を通して繰り広げられるであろう「新しい自分、自分にとっての意味をつくり出せた！」という＜豊かな人間づくり＞がたくさん見られる大会となることと思います。そしてその姿は，造形の未来を拓く学習のあり方に対する我々の提案であり，今後の方向性を示唆するものと考えます。

【北海道造形教育連盟研究主題】
『心豊かに未来に生きる造形教育』

北海道造形教育連盟　函館大会　　２０００．７．２６～２７
◆２０世紀から２１世紀へ心の風景（ビジョン）の発信を
◆豊かな自分づくりを生かす想創活動　　◎特色ある課題別分科会

↓

全造連北海道大会　（札幌会場）　　２００１．９．６～７
◆＜いま＞＜ここ＞＜わたし＞を基軸にして造形の未来を創る
◎感じて・つくって・ひらく授業の創造　造形ボックス　５つの扉―授業・分科会

↓

北海道造形教育連盟　帯広・十勝大会　２００２．７．２７
◆広い大地に紡ぐ夢
◆＜みる＞ものからの感動　＜つくる＞出したものへの愛着　＜いかす＞を知り得たことへの喜び　　◎＜心の豊かさ＞を育む

↓

北海道造形教育連盟　空知大会　　２００３．７．２９
◆＜ふれあう＞素材や人とのふれあいを通してつくる喜びを感じる
◆＜さぐる＞素材や表現方法を探ることを通して，つくる喜びを感じる
◆＜つくりだす＞造形活動を通して作品や人間関係をつくる喜びを感じる

↓

北海道造形教育連盟　旭川大会　　２００４．７．２８
◆「生の造形教育～身体で感じ　感性を磨くための出会いを求めて～」
自分の身体を通して，対象・事象から学び，造形性の意味（価値）とかたちを発見的に創造していく　◎＜出会い＞を重視することによる身体性の復権と創造

↓

北海道造形教育連盟　函館大会　　２００５．７．２８
◆めざめる感性（こころ）　きらめく個性（かたち）
◆地域空間がいざなう造形活動のひろがり
◎「ひと・もの・くらし」を素材として子どもの感性をゆさぶり，感受性，発想・構想力を発揮させる

造形活動による豊かな人間づくり

2006年 札幌大会へ

【札幌大会テーマ】
造形教育を「ひらき」,「すくすく育てる」ことから,「つくるの大好き！」な子どもを

研究概要

第55回　全道造形教育研究大会　函館大会テーマ
めざめる感性（こころ）　きらめく個性（かたち）

研究主題
「地域空間がいざなう造形活動のひろがり」

函館大会研究部長　柿　崎　雄　二

1．はじめに

私たちをとりまく社会情勢の変化はめざましく，物質的環境や情報メディアの発達は，子どもたちの生活に様々な影響を与えている。

このような状況においてこそ，豊かな情操を育む造形教育の果たす役割を再認識し，社会全体に発信していく必要があるのではないだろうか。単に豊かさや合理性を追求して時代に迎合するのではなく，人が希求する，美しさに感動する素直な心を呼び覚まし，豊かな社会を築いていこうとする力を育んでいくことが大切であると考える。

2．函館大会テーマ

「めざめる感性（こころ）　きらめく個性（かたち）」

私たちはこれまで，『「豊かな自分づくりを生かす想創活動」～２０世紀から２１世紀へ～心の風景（ビジョン）の発信を！』という研究主題を設定し，実践を重ね，子どもたちの心の豊かさや感性及び創造性を育んできた。この度の大会を開催するにあたり，これまで得られた成果と課題を踏まえながら，子どもたちにとって身近な環境としての地域空間に焦点をあて，そのよさや美しさに気づき，感動するような造形活動を展開することにより，より一層感性を磨き個性を伸長することができるのではないかと考えた。

キーワード

感性（こころ）とは

「様々な対象・事象からよさや美しさなどの価値や心情などを感じ取る力」
「美しさや，命の大切さ，悲しみ，人情などの心的な価値を素早く感じとれるということ」
本大会では，美しさや心情，夢，希望，憧れなどとともに，興味・関心・意欲・態度を含めて，感性をより多面的におさえ，「感性（こころ）」ととらえた。

個性（かたち）とは

子どもが題材・材料・地域から受けた刺激によって「感性（こころ）」がめざめそのイメージ独自の手法で，創造的に創意工夫し，その結果を表出させたもの，あるいは表出に至るまでの一連の行為とおさえ「個性（かたち）」ととらえた。

本大会では，美しさや心情，夢，希望，憧れなどとともに，興味・関心・意欲・態度を含めて，感性をより多面的におさえた。感性（こころ）は，潜在的に子ども一人一人が持ち合わせているが，それに気がつかず十分発揮できずにいることが多く見られる。

そこで、何らかの造形的な刺激を与えていくことによって，自分自身のよさに気づき，こころの扉を開き，いろいろな事象にかかわっていくことを目指した。

これらをふまえ，子ども相互の活動や表現のよさ「個性（かたち）」を認め合うことで，互いの「感性（こころ）」が研ぎすまされ，個性のきらめきにつながるものとおさえ，本大会テーマを設定した。

3．研究主題

「地域空間がいざなう造形活動のひろがり」

私たちの住む函館，道南地区は，歴史的にも古く，文化，経済，産業，農業，漁業，林業などの拠点として栄えただけでなく，美しい自然環境，風情，ロマン，異国情緒，ハイカラなど感性を揺さぶり，いざなうような風景，情景，心情を与えてくれる多くの面からの財産をもった地域である。そこで，私たちは，函館，道南という地域空間に目を向けることから，表現や造形活動を地域とともに掘り起こし，見直すこととした。子どもや教師が，地域に存在する空間，場所，人材，施設，文化，風土などと深くかかわり，それらを題材，テーマ，素材として効果的に活用することにより，表現や鑑賞の活動をより豊かなものとしていくことができるのではないかと考えた。

そこで，地域空間を「ひと・もの・くらし」という３つの視点からとらえ直し，子どもの美的感受性や発想・構想力や，創造力を育み，個性に応じた心豊かな造形活動を展開し，研究主題の具現化を目指した。

地域空間とは

ひ　と　○人材，各種団体，美術館・博物館の学芸員
　　○歴史上の人物，地元作家
　　○憧れ，希望，夢，思いやり

も　の　○風，光などの自然現象
　　○建造物，街並み，公共空間の造形物
　　○海，山，自然，生き物，水産物，特産物

くらし　○街の雰囲気，印象，風土，文化，歴史，祭り
　　○夜景，光，船，港，産業（漁業，農業，観光など）
　　○各種遺跡，五稜郭，異国情緒

4．研究内容

研究の視点

（1） 地域空間がいざなう感性（こころ）の育成

・地域空間（ひと・もの・くらし）をもとにして，創造的な造形活動に興味・関心をもち，進んで取り組む態度を育成する。
・地域空間（ひと・もの・くらし）とのふれあいを通して，鑑賞活動の充実を図り，様々な見方や感じ方を深めようとする心を育成する。
・地域空間（ひと・もの・くらし）に積極的に働きかけ，五感を生かし，楽しみながら，持てる力を十分に生かそうとする態度や心を育成する。

（2） 地域空間がいざなう個性（かたち）の伸長

・創造的な造形活動の基礎・基本的な能力を育む，地域空間（ひと・もの・くらし）の効果的な活用を図る。
・子ども一人一人の持ち味や可能性を積極的に見いだす地域空間（ひと・もの・くらし）の活用を図る。
・地域空間（ひと・もの・くらし）から，感受し，自ら創造的な発想力や構想力を働かせ，創意工夫し，表現する力の育成を図る。

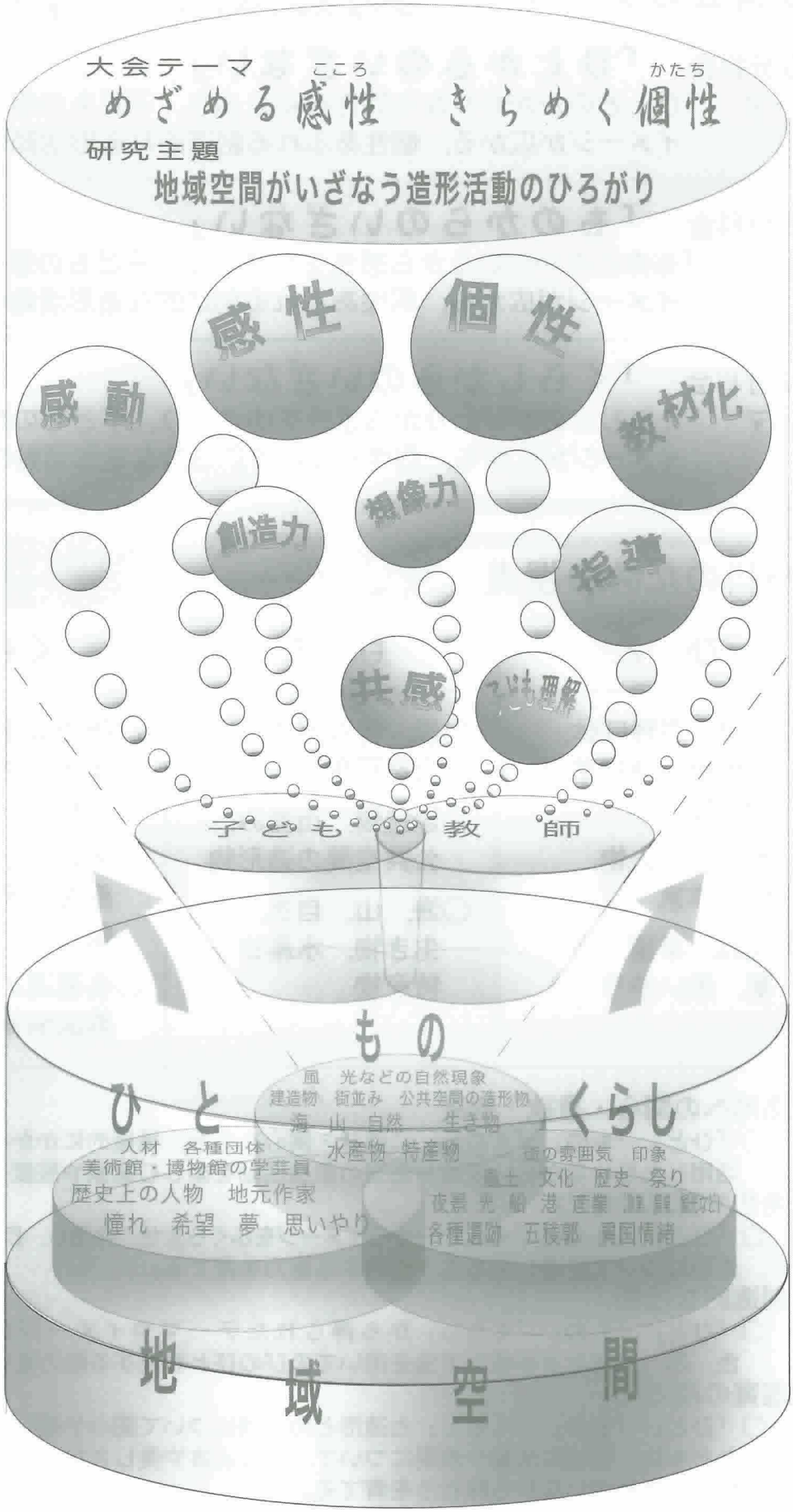
（3） 地域空間（ひと・もの・くらし）を生かした題材開発

・図画工作・美術科の目標や内容に示す資質や能力を確かめ，地域空間（ひと・もの・くらし）を活用し，様々な視点から教材化を図り，新しい表現の可能性を見いだす。

（4） 学習指導の展開

・多様な授業形態
・指導と評価の一体化
…個の実態に即し，自己評価や相互評価の工夫など，指導に生きる評価方法を取り入れる。
・総合的な学習の時間との関連

5．研究構想図


大会テーマ
めざめる感性（こころ）　きらめく個性（かたち）
研究主題
地域空間がいざなう造形活動のひろがり
感性
個性
感動
教材化
創造力
想像力
指導
共感
子ども理解
子ども　教師
もの
風　光などの自然現象
建造物　街並み　公共空間の造形物
海　山　自然　生き物
ひと
人材　各種団体
美術館・博物館の学芸員
歴史上の人物　地元作家
憧れ　希望　夢　思いやり
水産物　特産物
街の雰囲気　印象
風土　文化　歴史　祭り
夜景　光　船　港　産業
各種遺跡　五稜郭　異国情緒
くらし
地域空間

分科会のテーマ

1・2・5分科会　**「ひとからのいざない」**
◆テーマ　「ひととのかかわりから感性をゆさぶり，子どもの想いやイメージが広がる，個性あふれる創造的な造形活動のあり方」

1・3・6分科会　**「ものからのいざない」**
◆テーマ　「ものとのかかわりから感性をゆさぶり，子どもの想いやイメージが広がる，個性あふれる創造的な造形活動のあり方」

4・7分科会　**「くらしからのいざない」**
◆テーマ　「くらしとのかかわりから感性をゆさぶり，子どもの想いやイメージが広がる，個性あふれる創造的な造形活動のあり方」

教材科のための視点

	ひ　と	も　の	くらし
地域空間にかかわるキーワード	○人材，各種団体，美術館・博物館の学芸員 ○歴史上の人物，地元作家 ○憧れ，希望，夢，思いやり	○風，光などの自然現象 ○建造物，街並み，公共空間の造形物 ○海，山，自然，生き物，水産物，特産物	○街の雰囲気，印象，風土，文化，歴史，祭り， ○夜景，光，船，港，産業（漁業，農業，観光など） ○各種遺跡，五稜郭，異国情緒
教材化の視点	造形への関心・意欲・態度 ○「ひと」「もの」「くらし」に興味・関心をもち，積極的にかかわったり活用したりしながら，表現や鑑賞の創造活動を楽しむ意欲や態度を育てる。 発想や構想の能力 ○「ひと」「もの」「くらし」からイメージをふくらませ，発想し，自分なりの表現について見通しをもち，構想する能力を育てる。 創造的な技能 ○「ひと」「もの」「くらし」から得られたテーマやイメージなどを，色，形，立体など多様な方法を用いてのびのびと表現する能力を育てる。 鑑賞の能力 ○「ひと」「もの」「くらし」と造形との関連について関心や親しみをもつとともに，自他の活動や表現について，そのよさや美しさなどに気づき，相互に認め合いながら味わうを育てる。		

分科会・討議の柱

各分科会の討議の柱

1分科会（幼稚園・小学校）　ひと・ものからのいざない

・地域素材の教材化はどうあるべきか。
・感性，個性をいかに育むべきか。

2分科会（小学校高学年）　ひとからのいざない

・子どもたち一人一人の感性，個性を育むために，
　どのように，人，地域から教材化していくのか。

3分科会（小学校中学年）　ものからのいざない

・感性，個性を育むための地域素材の教材化のあり方。

4分科会（小学校高学年）　くらしからのいざない

・地域素材を生かした教材化により，感性をゆさぶり
　子どもの変容を促すためには，どのような指導法がよいか。

5分科会　ひとからのいざない

・身近な人を取り込む授業の工夫。
・想いを引き出す授業展開。

6分科会　ものからのいざない

・地域素材をどのように生かしているか。
・個性を生かした授業の工夫。

7分科会　くらしからのいざない

・地域空間を生かした造形活動と自己表現について。
・中・高の現状や連携について。

記念講演

◇講　師

渡　辺　保　史　氏

◇演　題

「発見」と「共創」の学びをデザインする

情報デザインが媒介する造形教育と地域コミュニティ

造形教育は，地域社会の中でこれからどんな新しい学びのスタイルを創出することができるでしょうか？

それを考えるとき，欠かすことができない重要な発想と方法を提示するのが，「情報デザイン」という領域です。地域生活の中に潜在している隠れた価値を発見し，その価値を異分野と異世代の知恵と経験のつながり合いから生まれる協働によってさらに高めていくこと――。

講演ではこうした造形教育の新たな可能性を，函館で行われた子どもたちのアートプロジェクト「ハコデジアート探検隊」の実践報告をもとに展望してみようと思います。

渡辺保史（わたなべ・やすし）　　**プロフィール**

1965年生まれ。北海道函館市出身。国立弘前大学人文学部卒業後、新聞記者をへてフリーランスのジャーナリストとして，デジタル技術によってもたらされる文化の変容や次世代型のデザインが切り開く21世紀社会の可能性や課題について実践の現場に踏み込んで考察を続けてきた。

著述活動の一方で，90年代後半より，各種のデザインプロジェクトにプランナー／ディレクターとして，ウェブサイト「センソリウム」，都市環境マップ「ハコダテスローマップ」，次世代携帯電話研究会「SH－Mobileラボ」などを手がける。このほか全国教育系ワークショップフォーラム，都市再生ワークショップ「ハコダテスミカプロジェクト」などの参加・体験型の学習や創造に関する場づくりの活動にも携わっている。

現在，智財創造ラボ主任研究員，ＮＰＯ法人ヒューマン・センター・デザイン・イニシアティブ理事，ＮＰＯ法人グリーンマップ・ジャパン運営委員，函館マルチメディア推進協議会幹事，武蔵野美術大学デザイン情報学科非常勤講師などを務めている。

主な著書に「Digital Rights　デジタルコンテンツの知的所有権」（オライリー・ジャパン）「情報デザイン入門　インターネット時代の表現術」（平凡社新書）「情報デザイン　わかりやすさの設計」（共著，グラフィック社）創造するコミニュティ」（平凡社）など

ハコデジアート探検隊

～見つけよう形！　楽しもう色彩！　発見，私たちの函館～

●主催：第５５回全道造形教育研究大会函館大会実行委員会（函館市美術教育研究会）
●後援：北海道教育大学教育学部函館校美術講座，函館マルチメディア推進協議会

目　　的

大会テーマ「めざめる感性(こころ)　きらめく個性(かたち)～地域空間がいざなう造形活動のひろがり」にもとづいて，地域(「ひと」「もの」「くらし」)と造形，地域とデジタルアーカイブを連携させたアートプロジェクトを実施し，造形大会に関わる教師を含め，児童・生徒の感性をゆさぶり，個性がきらめくような内容のテーマの具現化を図る。

内容と方法

１．実施日：平成１７年６月１１日（土）

２．実施場所：函館市内，駅前地区から，
元町・青柳・末広地区にかけての一帯

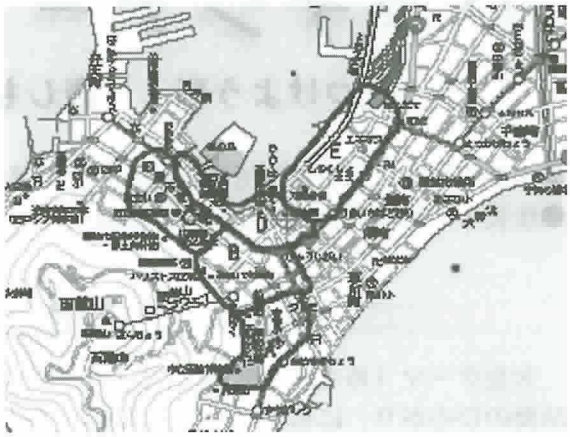
３．参加者：のべ８６名
（１）函館市内児童・生徒および参加校の教諭
・小学校～旭岡小　昭和小　湯川小　駒場小
日吉が丘小　深堀小
・中学校～旭岡中　附属函館中　本通中
合計　４４名～　児童・生徒５～６人×８組（小６組、中２組）
教諭　１８名
（２）北海道教育大学教育学部函館校美術講座学生（２４名）
※大学の授業の一環として参加。児童・生徒１グループに２～３名程度がサポートする。

４．プロジェクト実施にいたるまで
（１）プレワークショップ
・附属中学美術部による実施　4/29 撮影　　5/15 フォトウォーカー 実施
・該当学校教員のフォトウォーカー実習　5/15 実施　　６名参加
（２）プロジェクトの主旨説明とオリエンテーション
第１回　ミーティング　5/18 協力大学の先生　　参加大学生
（３）協力スタッフのメーリングリスト作成と情報の共有化
・参加美研の先生方　・協力者　・大学の先生・学生　など
（４）渡辺氏よる地域と情報デザインやフォトウォーカーについての参加学生へのレクチャー
6/2 実施　未来大学生参加
（５）参加教諭・大学生との最終ミーティング（6/7）実施

５．実施内容

（１）函館市内を小・中各１グループにデジタルカメラを持たせ，電車・徒歩で，以下の指定区域をテーマにもとづいた内容でデジカメで撮影する。

Ａ　青柳・函館公園地区
Ｂ　元町・教会地区
Ｃ　元町・公園地区
Ｄ　金森倉庫地区
Ｅ　駅前・朝市地区



（２）探検テーマ

・小学生　～　ハコダテ百面相 ～ 色と形で探す，カオ，かお，KAO。

自然，建物，窓，道路，壁など，様々なものの中にひそむ『顔』のように見える色，形，などを目をこらして見つけ出してみよう。

・中学生　～　函館，夏発見！　再発見！　～ 色と形で感じとろう，夏の季節感

夏を感じさせる色彩や形，夏の光と影，自然，建物，もの，それらの材質感や表面の細かな様子などから，美しさやおもしろさを見つけ出して，夏の函館の季節感を探ってみよう。

（３）撮影データとメモをもとに各グループが学生とともに，Ａ画像をもとにしたフォトウォーカーを使った作品に仕上げ，大会当日にデジタル化してＷＥＢ上で公開する。さらには，写真を出力したものをコラージュとして共同制作し，大会当日に作品展示するほか，デジタル化してＷＥＢ上で公開する。

（４）当日日程

9:00　参加者集合函館駅前広場　開始
9:30　集合完了　日程確認・諸注意
9:45　ハコデジアート探検隊開始
10:00　グループ毎に撮影開始
11:30　探検隊撮影終了
　　終了地点付近で，各グループ毎に，昼食をとる。～12:00
12:15－12:30　バス乗車移動
13:00　大学着
　　大学内でフォトウォーカーによるデジタル化，コラージュ制作
15:30　探検隊終了
16:00　解散

6．成果と課題

（1） 企画，準備，実践

・全道大会実行委員会において，大会テーマ「めざめる感性(こころ)　きらめく個性(かたち)～地域空間がいざなう造形活動のひろがり」にもとづいて，地域(「ひと」「もの」「くらし」)と造形，地域とデジタルアーカイブを連携させたアートプロジェクトとして企画し，実践したが，地域と美術という視座からのひとつの試みとしてはまずまずの成果をおさめることができた。造形大会に関わる教師を含め，児童・生徒の感性をゆさぶり，大会テーマに迫ることができたと考える。（以下にアンケート結果を掲載）

・企画，準備にあたっては，美術研究会会員間の意見交流をしながら，手探りの状態から始まった。新年度をはさんでの短い期間での準備となったが，何度かの会議やメールのやりとりをしながら，大会講師の渡辺氏をはじめとし，北海道教育大学函館校美術教育講座の先生方や学生たち，各方面の人々の協力で何とか実施にこぎつけた。このプロジェクトの立ち上げ，準備に関わった多くの人々に大変感謝している。

・小中学校教諭以外の人々とのスケジュール調整などが難しい時もあったが，一つの目的に向かうことで地域コミュニティとしての連携を模索することができた。また，美術を地域にどのように発信していくかという一つの情報デザインという視座から，美術と造形教育の関わりを考えるよい機会となった。

（2） 学生スタッフの感想

①子どもたちとのかかわりについて

・子どもたちとは，自己紹介の時にあだ名を教えてもらったり，散策の途中でお菓子を貰ったりと，想像していたよりずっと仲良くなれました。また，どの子どもも自分なりに新しい発見をしようと努力していたように見え，わたしも少しですが，その発見の手助けができたのではないかと思っています。そして，散策中，子どもの発想力に驚き，感動しました。

・わたしの担当させていただいたグループは全員が小学校の四年生でした。行動を共にしていくうちに，担任の先生との子どもたちの信頼関係の深さに気付かされました。自分と子どもとの付き合いを考えたいと思います。

・生徒は事前にフォトウォーカーの指導を受けていたので，私たちの手助けなく順調に進んでいて，大変やりやすかったです。初めは少し緊張した様子でしたが，一緒に作業していくうち会話も弾み，私も楽しく接することができました。

②ハコデジアート探検隊に参加してみて

・わたしは教育実習では中学校と高校しか行っていないので，小学生への指導の仕方や対応の仕方を学べたように思います。そして，私自身も散策中に新しい発見が多くでき，フォトウォーカーの使い方もわかり，どの面を見ても，大変実りある貴重な体験となりました。ありがとうございます。

・観光客の人たちや，地元の人たちとの交流があり，また，函館の新たな一面を発見でき，生徒にとっても私たちにとっても，地元のことを深く知ることができたよい機会であったと思います。なにより生徒や先生と接することで，勉強になることが多かったです。

・私自身も住み慣れた町の新しい顔を見つけ，子供たち以上に楽しんでしまいました。外部の規範を獲得させるのにかたよってしまいがちといわれる現代では，今回のような子供たちが自分で意味を見い出せるようにする機会をつくることが最も重要であると感じます。今回の企画からは，“角度を変えてものを見る”という現代にかけてしまいがちな思考と，インターネットを使って，コミュニケーションをするという現代らしいメディアリテラシーの重要性とを同時に感じ，新しい感覚の面白い企画だと思いました。ただ，私の担当させていただいた班は3年生（コラージュ）で，午後の作業からの子供の集中力をみると，1日で行うのは少し残念であるような気がします。

・今回のように，現職の先生方の指導の下，生徒と学生が地域でかかわりあえるような企画は，新人育成の場（教員）としても大いに意味のあるものだと感じるので，これからの発展にも期待し，次回も協力させていただければ幸いと思います。このような企画に参加させていただけたことを心より感謝致します。ありがとうございました。

（3） ハコデジアート探検隊終了後のアンケート集計結果

（小学生　34名　中学生　10名　　回答）　　人数表示　一部%表示

① このアートプロジェクトに参加してみて，どうでしたか。あてはまるものに○をつけてください。

	小学生	中学生		小学生	中学生
A　参加して大変よかった	27	9	B　参加してよかった	7	1
C　それほどでもなかった	0	0	D　全然つまらなかった	0	0

② A，Bと答えた人は，どんなことがよかったですか。また，楽しかったですか。

（小学生）

・西部地区をまわって写真をとったり，フォトコラージュを作ったりできたから。K

・初めてこのハコデジアート探検隊をやって，すごくいい体験ができて，グループ行動でいろんな所をたくさんみてとてもよかったです。N

・映像をつくるのがとてもたのしかった。いろんなものがかおに見えた。K

・いろいろな所を見れたし，写真を撮っている時も，楽しかったけど，コラージュは100倍楽しかった。写真をかいぞうしたり，あまった紙でふきだしをかくのがとても楽しかった。来年もあったら，ぜったいやりたい。N

・今日は楽しかったです。写真を撮ったり，お弁当を食べたり，友だちと話をして，今日は，本当に楽しかったです。今日はありがとうございました。Y

・私は，こういう土曜日や日曜日に出かけたりするのが，少なかったので，こういう楽しいことは少ないです。特に写真をとってパソコンでいろいろしたりするのが楽しかったです。K

・顔をテーマにして，車やマンホールなどを探してみて，おもしろかった。フォトウォーカーで撮った写真をいろんな形にして，最後にプロジェクターでスクリーンに映して，おもしろかった。K

・今までふつうに歩いていた歩道でも，顔に見えて，びっくりしました。また「フォトウォーカー」というのをパソコンを使って作ってみて，とても楽しかったです。

（中学生）

・同じ学校の人ともそうだけど，違う学校の人とも，この『ハコデジアート』を通じて親しくすることができたし，自分たちのとった写真をストーリー性を持たせてつなげていく今回の作業がとても楽しかったから。K

・初めて会った人たちと楽しく交流ができたので，とてもよかったです。T

・普段あまり体験することがないことを体験できてよかったです。また，他校の人とも話ができたり，こういう点においてもかなり貴重な経験ができたからです。H

・自分が撮った写真がフォトウォーカーで動いているのを見て，楽しい場面や，感動した場面があり，函館のよさを再認識しました。写真を撮っていくのもとても楽しかったです。S

・自分が住んでいる函館をじっくり見て，フォトウォーカーで見るというのは，函館のよさがもう一度わかり，とてもよかったです。美しい景色や歴史的建造物などを見るのはとても興味深かったです。M

・主にPCでフォトウォーカーを使って編集している時が，妙に楽しかった。函館の街を歩き回って何気ない所に，こんなものが会ったんだなーなどと思ったりしました。K

・函館に住んでいても，テーマを決めてよく注意しながら見る，撮ることはなく，函館の新しいところを知ることができてよかったです。また，みんなと協力して作品を作ったのも楽しく自信作が作れました。S

③ 今回，大学生の皆さんが，君たちのサポートをしたり，一緒に制作に加わってもらいました。どうでしたか。その感想を書いてください

（小学生）

・ぼくたちをやさしくサポートしてくれて，本当によかった。N

・わからないことをきらくに聞けました。いつも見ている町がちがうふうに見えるなどとお話もしました。W

・みんなにやさしくしてもらったし，いっぱいお手伝いをしてもらって本当にうれしかった。また，会いたいし，こっちの方がお世話になりました。F
・知り合いのように，やさしくしてくれて，とてもうれしかったです。私も大学生の人のようになりたいと思いました。

（中学生）

・一緒にまわってくれたお姉さんたちは，とても親切で，親しみやすく楽しい人だったので，今回楽しむことができたのだと思います。初めて会った人ともすぐに仲良くできちゃうところは，尊敬しちゃいます。素敵な人たちで本当によかったです。K
・２人の大学生の人がついてくれましたが，優しく親しみやすかったです。一緒に歩いていて，とても楽しく面白かったです。とても感謝してます。大学生の人のおかげで見つけられたものもありました。M
・アドバイスをしてもらったりしたので，よかったです。自分からもっと聞いてみればよかったと思います。M

④ 全体を通しての感想

（小学生）

・今まで知らなかったことや西部地区のいろいろなことがわかって楽しかった。また参加したい。K
・みんなと調べたことで，町のことを今までより知ることができました。いつも見ている自分の町でもよくよく見ると，おどろきがたくさんありました。私の好きな写真は，石でつくったかおとすしのかおです。W
・町にはよく見たらいろいろなものがあるのだなあと思った。Y
・あらためて函館のよさがわかった。また，とてもべんきょうになった。また，参加したい。T
・かなりおもしろかった。フォトコラージュを作るときもとてもワクワクした。M
・はじめてやっていろいろなことを学んでとてもいい体験になったと思いました。N
・今回使ったフォトウォーカーというのは，写真が次々と現れたりしてとても面白かった。コメントも入れてみたいなぁと思った。M
・コラージュがこんなに楽しいと思わなかった。ほかの写真やざっしでもコラージュしてみたい。本当に楽しかった。N
・ハコデジアートに参加して本当によかった。もし，賞がとれるようだったら，ぜったい優勝だと思う。来年も参加したいです。N
・写真を写したり，いろいろな所に行ったり，いろんな所を見たりして，すごく疲れたけど，すごく楽しかった。S

（中学生）

・写真に何か付け足さなくても，次の写真の写り方をいろいろなものにするだけで，とても素敵な作品になることに驚きました。また，こういうことをやるなら，参加したいです。作業中アクシデントがあったので，作業がうまくいかなったことが，なんというか，心残りでした。K

・これらのことを通じて，日常や学校生活の美術でいかしたいと思いました。M
・自分の美に対する関心が深まると同時に，知らない人との交流もできて，町の見方にも変化があらわれたので，今回参加してよかったと思いました。T
・今回，先生からの小さなチャンスから，興味，楽しさ，勉強へと発展し，よい思い出と体験をさせてもらいました。今後も機会があったら，また参加してみたいと思いました。本日は本当にありがとうございました。H
・自分の感性でとった写真，それをパソコンを利用しての作業，いろいろためになり，また，楽しかったです。H
・今回のイベントを通じて，函館の美しさやおもしろい所を再発見したり再認識できました。S
・今日，このイベントをやって函館のよさがもう一度わかり，函館という地域を再発見することができました。大学生の人たちと一緒にまわるのもとても楽しく感謝しています。美術的な関心も深まり，とてもよかったです。参加してよかったです。M
・皆と協力するのは大変ですが，協力できた時は，達成感で一杯じゃないかなぁーと（笑）身近なところにも以外にな

いものがあったり，普段目につかないものが気になったりと，自分が成長したのではないか，前より，今回のイベントには参加してよかったです。K

・函館はよくよく見ると，いろいろなものがあると思った。初めてやったけど，おもしろかったです。デジカメで写真をとるのをうまく撮れたと思います。M

・“夏”というテーマで天気があまりよくなくてどうなるだろう…と思いましたが，大学生のお姉さんたちのアドバイス，明るさもあって，成功させることができ，とてもよかったと思います。今度もできたら参加したいと思いました。Webにのったら，ぜひ家族に見せてみたいです。S

⑤ 参加する前と，参加した後の自分の気持ちに何か，変化はありましたか。あてはまるものに○をつけてください。ひとつでなくてもよいです。

	小学生		中学生		全体 %
A 函館という地域を再発見することができた	18人	52.9%	6人	60%	54．5
B 図工・美術に対して，興味・関心が深まった	11人	32.4%	6人	60%	38．6
C 自然や事物などの色や形について様々な見方ができるようになった	11人	32.4%	4人	40%	34．0
D 自分のものごとに対しての感じ方やとらえ方がよくなったように感じる	4人	11.8%	3人	30%	15．9
E 協力して何かを作ったり，考えたりすることのおもしろさやむずかしさを知ることができた	13人	38.2%	6人	60%	43．1
F 特に変化はない	1人	2.9%	0人	0%	2．2
G その他（	0人	0%	0人	0%	0

7．おわりに

アートプロジェクトとしての完結は，大会当日のＷｅｂ上での公開であった。しかし残念なことに，画像データが重すぎたためにソフトが思うように動かないというアクシデントも起き，大会当日には，ビデオ映像として公開することはできたが，Ｗｅｂ上での公開ができずに終了してしまった。参加してくれた子どもたち，関係者，大会参加者には申し訳なく思っている。できあがった作品をＷｅｂ上で公開することにより，全道各地からアクセスしてもらい，より多くの人々とのコミュニケーションを図り，また函館からの地域発信に率直な感想などを寄せていただければ，大会のテーマへより近づくことができたのではと思っている。

しかし，このプロジェクトを実践することで，様々な人々との交流を促し，美術と地域の活性化を図る一つの試金石になったのではないかと思う。前述した子どもたちや大学生のアンケート結果を見ると，参加した彼らにとって心に残るプロジェクトとなったことはいうまでもない。また，このプロジェクトに関わった私たち教員にとっても教室という空間から，“地域”という魅力的な情報空間に挑戦したことで，美術を通しての新たな視点を得ることができ，意味深いものとなった。函館市美術教育研究会にとって，次年度への造形教育，造形活動の一つのステップとなったと考える。

最後に，この体験をした子どもたちや学生，教員が，何かの形で花開かせていくことを切に望んでいる。

（文責　佐々木　善 憲）

第55回　全道造形教育研究大会　函館大会
授業者・提言者・助言者・司会者・記録者一覧

各分科会一覧

校種	学年	分科会名	授業者	提言者	助言者	司会者	記録者
幼稚園	3・4・5歳児	ひと・もの からの いざない	小林恵理子 太田　洋子 中山　利広 （教育大学附属函館幼）	山形　弘枝 （函館市立金堀小） 尾形　旬美 （函館市立はこだて幼）	繪面　和子 （教育大学函館校非常勤講師） 小平　征雄 （教育大学函館校教授）	高橋　喜子 （函館市立北昭和小）	山下　清江 （函館市立日吉幼） 岸本小百合 （函館市立青柳小）
小学校	6年	ひと からの いざない	西館　純 （函館市立昭和小） 楢山　聡 （教育大学附属函館小）	中谷　文武 （函館市立鍛神小） 新保　理奈 （別海町立別海中央小）	谷口　光伸 （大成町立平田内小教頭） 山口　雅子 （帯広市立東小教諭）	佐郷谷　滋 （鹿部町立鹿部小）	松田　恭子 （教育大学附属函館小） 西　貴子 （函館市立万年橋小）
小学校	4年	もの からの いざない	水島　賢久 （函館市立駒場小）	小笠原博子 （森町立尾白内小） 福島由紀子 （札幌市立澄川西小）	竹内　良容 （八雲町立大関小校長） 東堂　亮之 （函館市立神山小教頭）	三品　充子 （函館市立港小）	多田　淳 （函館市立旭岡小） 小野瀬真理 （函館市立神山小）
小学校	5年	くらし からの いざない	山田　光 （函館市立旭岡小）	井田　昌之 （大成町立平田内小） 佐伯　晶宣 （江別市立江別第三小）	黒田　雅世 （大野町立島川小校長） 野呂　憲一 （函館市立西小校長）	佐々木善憲 （上磯町立浜分小）	後藤　博子 （函館市立北星小） 久保杉由佳 （函館市立千代田小）
中学校	2年	ひと からの いざない	齊藤　悦子 （函館市立赤川中）	庄子　展弘 （旭川市立春光台中） 宮城亜紀子 （教育大学附属養護）	佐藤　昌彦 （教育大学函館校助教授） 寺嶋　文憲 （札幌市立東米里小中校長）	笠松　英治 （函館市立戸倉中）	花岡　康成 （函館市立桐花中） 阿部　真琴 （函館市立桔梗中）
中学校	3年	もの からの いざない	佐々木壮一 （函館市立的場中）	後藤　征秀 （知内町立知内中） 鎌田　俊博 （滝川市立江陵中）	大島　道夫 （厚沢部町立館小校長） 川合　薫 （旭川市立桜岡中教頭）	赤坂　嚴男 （函館市立本通中）	長峰　詠子 （函館市立潮見中） 米田　康子 （函館市立亀田中）
中学校	2年	くらし からの いざない	九千房政光 （函館市立銭亀沢中）	三浦　薫 （函館東高等学校） 玉造　至 （美幌町立北中）	中村　吉秀 （函館市立北中教頭） 煤賀　克文 （別海町立豊原小校長）	仲井　靖典 （函館市立湯川中）	三谷　龍司 （函館市立北中） 冨尾　拓 （教育大学附属函館中）

分科会討議記録

1分科会　「ひと・ものからのいざない」

授業1　北海道教育大学附属函館幼稚園（3・4・5歳児）
『うみだ！うみだ！』　　小林　恵理子
中山　利広
太田　洋子

提言1　函館市立金堀小学校（2年生）
『ハコのゆめ』　　山形　弘枝

提言2　函館市立はこだて幼稚園（2年生）
『わくわくミュージアム　～誰にあえるかな どんな作品にあえるかな やってみたいな～』
尾形　旬美

司会者　函館市立北昭和小学校
教　諭　**高橋　喜子**
助言者　教育大学函館校
非常勤講師　**繪面　和子**
助言者　教育大学函館校
教　授　**小平　征雄**
記録者　函館市立日吉幼稚園
教　諭　**山下　清江**
記録者　函館市立青柳小学校
教　諭　**岸本　小百合**

分科会討議の柱

◇地域素材の教材化はどうあるべきか

◇感性・個性をいかに育むべきか

1．授業に関する研究討議

（1）授業者から

◇　テーマに向けて，水遊びを楽しんでいる子どもたちの姿や，函館の地域性を大切に進めてきた。保育室にブルーシートを張って活動させ，だんだんと活動の場を外に移していった。本時では，子どもが思い思いに表現してきたもので，グランドを海に見立てて，みんなで遊んでほしいと考えた。

◇　3歳児は，これまで新聞紙を素材として十分に遊んできた。「海のイメージ」はタコだったので，心材(新聞紙)を入れて大小のタコを作った。(最終的には魚に持っていきたかった)
心材の圧縮の方法（ふわっと、ぎゅっと)，飾り用のモールを繋げた魚，心材を詰めずに袋をふくらませただけの魚など，子ども自身の工夫が加わってきた。

◇　4歳児は，発泡トレーを鱗に見立てた魚を作製。
「海に行ってみたい」→「どうやって？」から「潜水艦」「船」という発想に広がっていった。絵の具でダイナミックに着色させ，「大きいと動かない」ということで小さい潜水艦も作製。
用具(段ボールカッター)の扱いについて，初めての刃物使用の体験と言うことで，手をかけすぎたのではないかという反省が残る。

◇　5歳児は，「海に行くには？」の問いかけに，ペットボトルから船を作製。風で動く帆船も。「もっとプールが大きければ遠くまで進むのに」という感想も。「海」のイメージは，鯨，鮫，タコ・・・など。「鮫にかじられたら大変」という発想から「海渡りゲーム」に，「作ったタコを使って遊べたらいいな」という発想から「タコ入れゲーム」に発展。グループで協力して作製していた。本時の意欲は旺盛で，年少児に船を貸すなど，様々なかかわりが見られた。

（2）意見交流

◆　題材の「海」は抽象的だと思ったが，飽きずに遊んでいた。「地域素材の教材化」について聞かせてほしい。

◇　3歳児は空港への園外保育の帰り啄木公園で「海」を体感。ブロックに描かれた小中学生の壁画のイメージが大きかった。特にタコに関心。その後，海の歌や波の音などの身体表現が自然に始まった。

◇　4歳児も園外保育帰りの熱帯植物園で，フェンス越しに「海」を体験。潜水艦の「潜る」という感覚を体験させたかった。本時はブルーシートで「潜水艦」を覆ったことで「海」を実感できたようで子どもたちは喜んで遊んでいた。

◇　5歳児も熱帯植物園で，遠目に「海」を体感。いかだ，船，への興味から海への関心を持ち，波の動く様子をイメージ化させることで広げていった。

◆　波のＢＧＭは海のイメージがわき，とてもよかった。日常的に活用しているのか？

◇　波の音は，新鮮に響くように本時のみ。日常的には，子どもたちが海の歌などを自分から歌い，口ずさみながら活動していた。

◆　石を取り入れたことが効果的。どのように材料を用意したのか？

◇　河原の石を用意したかったが，無理で，上磯の石別(海)から持ってきた。海に行ったことがある子は，「海には石がある」「昆布がある」と言い，石や草を入れる子がいた。

◇　用具としての油性ペンの取り扱い方として，「服についたらとれない」「ふたをしないとすぐ乾く」など教師の指導も重要。

◇　段ボールカッターの取り扱いについて，刃物という感覚を持たせた。「先生がいる時に使う」「サックを必ずする」等の約束を作り，一つ一つ確認した。

◇　園庭における環境構成(平面と立体の配置の面白さ)など，全体の雰囲気が良かった。テーマに向けて教師が子どもたちと一緒につくり上げてきたため，目的意識がはっきりして，子どもたちが自分の目的に沿って活動できていた。今の活動の説明と，次の行動の提示が大切。子どもの動きを見て，発達段階に合わせて支援の手をさしのべていた。子どもたちの意欲をふくらませて今日の活動に向かわせたことが，今日の活動に結びついていた。

（3）助言者から

◎　幼稚園の指導要領（H.10改訂版）では「知的気づき」に重点を置き，興味を持って活動を進めていくことを大切にしている。できないからと教師に助けを求めるのではなく，「じっと見る」「やってみる」「気づく」ことが大切。例えば、ペットボトルのはねを巻いても動き方が違う(前進，後退，停止)。ひっくり返してみる，ガムテープで固定してみる，「なぜ箱が沈むのに牛乳パックは沈まないのか」など，次の疑問や学びに発展。これらの活動や意欲が，小学校の生活科へと深化発展していく。(興味を持つ→試してみる→満足する→次の意欲)
環境設定として一回り大きいプールの用意や船を置く場の用意，また，遊び終わった船はプールの外に出すなどの指導を。

◎　色々な素材を使って，海をイメージするものをつくるのが前時までの遊びで，本時はその海で遊ぶという保育。幼児は，作られた海を本当の海に，ただの石を生きている魚にと見立てて楽しく遊ぶ。イメージする物をつくるためには教師による環境構成や支援が大切。実際の体験と仮想の体験、それらをたくさん体験させることが，豊かな感性と個性を育てることにつながる。

2．提言に関する研究討議

（1）提言者から

◇わくわくミュージアム～誰にあえるかな・どんな作品にあえるかな・やってみたいな～について

子どもの表現活動を大切に育て，生活に広げていく。ＮＨＫギャラリー「彩」，花壇の花での草木染め，千歳町会の方との交流（絵手紙の作成），道立美術館での鑑賞会，海草押し花作りなどの活動を通し，心が揺さぶられ，感性が豊かになってきている。教師は，一人一人の子どもの思いやつぶやきを拾い，心を通わせることを大切にしている。子どもたちの経験を単なるイベントにするのではなく，心に響く暖かい活動にすることも心がけている。また，地域とのつながりを大切にする中で，年配の一般市民の方が垣根をはずして子どもたちの活動の支援を申し出てくれたり，子どもたちがお礼状を出したりといった相互の働きかけが見られるようになってきた。開園して３年目であるが，これからも，暖かいふれあいをとおして，地域の皆さんに感謝し，子どもたちのきらめきや感性をのばしていきたい。

◇ハコのゆめ

函館の函とＢＯＸの箱をかけた題材名。子どもが素敵な環境を見逃すことが多くなってきた中，新しい視点で見て，感じて，感動してほしい，という教師の願いと，一緒に発見できた時の喜びを共有したいという思い。題材については子どもの興味を大切にしたいが，実態や教育的配慮に沿っているかなど教師がよく吟味することが大切。「関心・態度」「発想・構想」「表現」「鑑賞」それぞれの目標を設定。(表現のためには，適切で豊富な素材の提示も必要)
「ハコのゆめ」は「かなほりのすてきをみつけよう」というところからスタートしている。

生活科：「町を探検しよう」　→質問を入れることで地域の人との交流
「見つけたよ」カード→感じる心，イメージ
国語科：「探検したことを作文に書こう」

探検したことすべてが表現に結びつくわけではなく，子どもにとってはつくりやすさが優先される。自分の考えていることを平面に表現する「かるた作り」を経て，本単元の「ハコのゆめ」(ボックスアート)に到達する。平面（背景）と立体の組み合わせで，躍動感が出るように工夫させているが，完成後，独特の世界観が生まれている。また，友達からのアドバイスにより新たな気づきが生まれるなど，「鑑賞」が「評価」につながる場面も見られる。子どもたちが各段階にスムーズに移行できるよう，「継続的評価カード」を活用している。

（2）意見交流

◇　新しい地域の中で，何もないところからの始まり。お手伝いしてくれる方が手間を厭わない。だから，私たちもがんばれる。子どもたち一人ずつ一言ずつの関わりを大切にしている。小学校でも，地域とのかかわりを大切にしているが，幼稚園でも関わりを持った後に手紙を出したりして，地域とのかかわりを大切にしている。

◇　図工の時間数が大幅に削減。生活科，学級レク，図工で時間を捻出している。

◇　身近に素晴らしい人やものがあっても，教師側にそれに気づいたり生かそうと思う感性がなければ何にもならない。そのことに気づかされた。

◇　子どもが声を出しながら喜んでいた。教材化するのによく研究し，工夫されていた。子どもの心を豊かに育てるために，教師が美しいものを美しいと素直に感じる心がなければならない。

◇　地域素材を教材科するためには，教師はコーディネーターになる必要がある。子どもが喜んでいても，それは造形的な喜びではないかもしれない。それを，いかにして造形的な喜びに変えていくか。子どもたちが，造形的な関心を抱けるよう適切な支援をし，造形として理解しやすいものを素材として与えることも大切である。

3．助言者から

◎人間は，感性と知性の持ち主である。

美術の目指すもものとは　①創造

②文化（函館，身近な環境の中での人とのふれあいなど），人間理解

③心の教育，（感性を豊かに）→人間の土台としての礎

大人が作品を見るときの目線と，幼い園児が作品を見る目線の違いを考慮することが大切。

また，園外に出かけるときには「何を目標に」という思いを各自が持っていると，更に目的が生かされる。「かなほり」は三つの目標をしっかり押さえたことで評価が大切にされている。

感性と知性をうまいバランスで表現できる手だても重要。教師の感性が普段の子どもたちとのふれあいの中で生かされ，一人一人の子どもたちに対しての目標を，的確に捉えている。

◎幼稚園の評価例として，造形活動に力を発揮できなかった子を次にどう生かしていくかなど，その日の様子や個々の姿を記録している。何でも記録することが教材化への大切な手だて。小学校でも大切にしてほしい。

◎「造形教育」＝「造形遊び」と言う概念。文化を伝えていくことが大切。幼稚園教育であれば，教師が，エッセンスを選んで与えていく。子どもたちは，教師によってエキスを受け取っていく。造形遊びにはプロセスがある。（着想→工夫→構想→鑑賞）

造形の体験を，子どもが自分なりに生かしていくものである。

◎作品作りをさせるに当たって，鑑賞させることが大きく影響している。アイディア・着想など，他人の考えつかないものを求めがちだが大部分は既に大人が体験したことからの選択。あまり難しく考えず，日常的にもっと身近な「素敵」を見つけるという文化の積み重ねが大切。

2分科会　「ひとからのいざない」

授業1　函館市立昭和小学校（6年生）／北海道教育大学附属函館小学校（6年生）
「私たち街づくりデザイナー」　**西館　純**
楢山　聡

提言1　函館市立鍛神小学校（6年生）
「啄木さがしの旅～啄木とわたしの一枚」　**中谷文武**

提言2　別海町立別海中央小学校（6年生）
「旅立ちに向けて～前任校別海小学校6年生の取り組みから～」
新保理奈

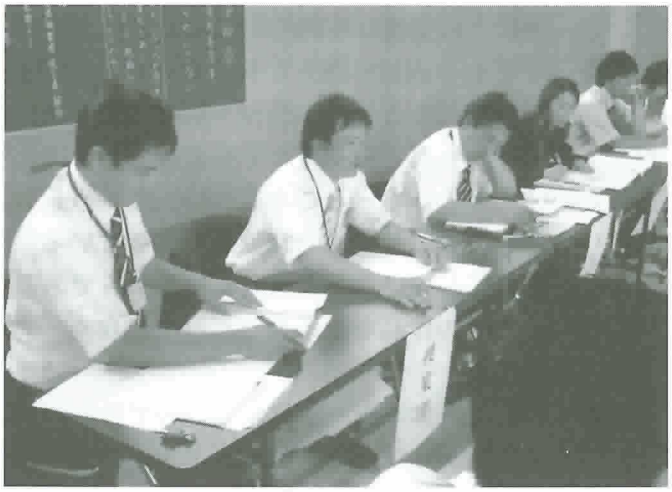
司会者　鹿部町立鹿部小学校
教諭　**佐郷谷　滋**

助言者　大成町立平田内小学校
教頭　**谷口光伸**

助言者　帯広市立東小学校
教諭　**山口雅子**

記録者　北海道教育大学附属函館小学校
教諭　**松田恭子**

記録者　函館市立万年橋小学校
教諭　**西　貴子**



分科会討議の柱

◇「子どもたち一人一人の感性・個性を育むために，どのように，人，地域から教材化していくのか」

1．授業に関する研究討議

（1）授業者から

◇　指導者も楽しんで授業をすることができた。作品づくりは今日で下描きを完成する予定だったが，欠席が多いグループもあり，途中である。全員そろってから話し合いをさらに進め，２学期以降完成にもっていきたい。

◇　二校合同ということで一緒に授業を行ううち（二校は徒歩１０分の距離），子どもたちが喜んで取り組んでいた。合同で行うということ，さらに図工の授業ということをふまえ，よい面，反省点を見い出したい。

（2）意見交流

◆　主題「人からのいざない」とのかかわりで，「函館」のとらえ方は二校の児童で違いはあるか。

◇　昭和小の児童は地域から出ることが少ないが，附属小の子どもは函館の全地域から集まっているので，広い視野で函館をとらえているのではないか。お互いが集まることで考えが広がり，よい面が出ている。

◆　今回のグループ活動までに，児童の交流期間はどのくらいあったのか。

◇　遊ぶことから始め，合同体育（ドッジボール，ミニ運動会）を行い，子どもたちは慣れ親しんだようだ。図工の学習に入り，最初のテーマ決めでは活発な意見交換が行われていた。今日は休み中ということもあり家庭の都合で欠席も多く，交流しずらかったようだ。

◇　子どもたちは意識，意欲が高く，もっと遊びたい，もっと一緒に学習したいと思っている。

◇　偶然集まった人間で練り合って学習をすすめていくのはとてもよいと思う。

◇　他校との交流は時間的問題もあり，グループで差が見られるのも事実である。

◆　子どもの表情に輝きが見られなかったのは，学校の違いだけではないと思う。「下描きを描いて色をぬること」が感性・個性の磨きあいになるのだろうか。６年生の発達段階であれば，自分一人一人で取り組んでもよかったのではないか。

◇　一人だと「もっとこうしたい」という思いが出ずらい。グループで話し合うことで作品をよりよいものにしていく意欲がでてきている。今回下描きが終わらなかったのは，さらによりよいものにしていこうと考えているからである。

◇　お互いの作品を認め合うだけではなく，考えをもちよることも感性を伸ばすことにつながると考える。

◆　ケント紙は水彩がやりずらいのではないか。

◇　できあがりはケント紙，ポスターカラーの予定である。しかし，子どもは水彩に慣れ親しんでいるのでそちらも視野に入れている。ポスターカラーと水彩の違いは学習させたい。

◆　人に思いを伝えるための媒体としてポスターがある。グループでやる以上完成度を高めないと，子どもたちは満足しないのではないか（例えばもっと大きな作品にする等）。また，レタリング，水彩絵の具の扱い方等の指導はどのようにしていくのか。

◇　図工としては色づかいはしっかりと指導していく。できあがったポスターを「どこにはり，誰にアピールするのか」ということを念頭において今後も取り組んでいく。

◇　できあがったポスターを多数の人にみてもらうことは児童にとって励みになるだろう。

◆　一人一人の思いをもとにグループ分けすることは可能か。

◇　１０年後の函館はどうあってほしいか，イメージを出し意見を交流しあった。その時点では子どもの思いはそれほど強いものではなかったので，グループは人数で調整した。その後，話し合いを重ねるうちに子どもの思いがふくらんできた。技巧表現にこだわって作品をつくることで，思いのエネルギーもふくらんでいくと考えている。

2．提言に関する研究討議

（1）提言者から

◇　函館カリキュラムの構想から今回の実践のヒントを得た。表したいもの（はがき，しおり等）に取り組ませたことで子どもたちは水彩の技法も身につけ，様々な表現を楽しむことができた。石川啄木を題材にし，身近な人物に目を向けさせることができたことは大きな成果である。しかしながら，子どものイメージをふくらませやすいものを準備することや，様々な技法を全員に定着させることは課題である。支援・評価のあり方を考えていきたい。

◇　図工の立体（粘土）の題材を広げて陶芸を扱った。家族への感謝の気持ち（想い）を「かたち」にかえ，作品づくりに取り組んだ。それぞれの作品は子どもたちの想いが表れたものとなった。小規模校ならでの実践になったと思う。

（2）意見交流

◇　石川啄木・短歌という限られたものからイメージをもつのは難しいのではないか。そこで作品として表現していくのが大事で，対象を自分なりにひきこむのが図工の表現だと考える。

◆　子どもの実態に合わせた題材の選択だったのか。

◇　宮沢賢治を題材にしたこともある。今回は，子どもの表したいことを表すということを目標にした。

◇　指導者が石川啄木に感動したということが素晴らしい。実践のなかには「共感」ということばがたくさんあり，とてもよいと思う。

◇　今回は図工のみで扱ったということだが，他の教科（国語）との関連も視野にいれることができるかもしれない。

◆　素焼き，本焼きは子どもに見せたのか。

◇　学校にある窯は古く，使えなかったので見せられなかった。今度はぜひ見せたい。

◇　土が火を加えることによって変質する部分は，図工として大事な部分である。

◆　児童の「やきもの」の経験はどのくらいあるのか。

◇　粘土はかなり経験しているが，陶芸は全くない。今回が初めてである。

◇　花器として作ったものに花を生けていること，家族への思いをふくらませながら箸置きを作ったことが素晴らしい。心の教育という面でもとてもよい。

◇　学校の実態，時間，費用等の問題があり，「やきもの」の取り組みは減ってきている。

3．助言者より

◎　近隣の学校が集まって授業をすることは興味深い取り組みである。複数でひとつの授業を練り上げていく機会を大切にしたい。グループ活動での様々な調整は，プラスの方向でとらえたい。今日の授業で，色の組み合わせを考える場面ではパソコンを効果的に使うことができていた。

石川啄木を扱ったのは函館ならではだが，やはり高度で難しい内容だと感じている。他教科との関連も視野にいれ，石川啄木を自分のものとしてとらえ，作品化していくと図工の目標が達成されるのではないか。

「やきもの」に心象表現を求めるのは非常に困難である。だからこそ，「やきもの」は最終的に使用できる物として焼いて欲しい。

今回の様々な実践は，ぜひ年間指導計画に位置づけて欲しい。材料・用具の取り扱いについては教える場面と子どもに任せる場面とのバランスを大切にして欲しい。

◎　授業を行う上で教師が楽しめるのは図工のよさである。子どもたち同士のなかで得るものがあって，合同で授業を行うことは効果があった。

短歌ひとつに一時間の扱いであったということだが，もう少し時間をかけた取り組みにも期待したい。

最近は廃材を用いた作品が多く，すぐにごみとして捨てられられる傾向にある。作品を長く使える物にするということは意識していきたい。

3分科会　「ものからのいざない」

授業1　函館市立駒場小学校（4年生）
『光と風のハーモニー　～またたく光で夜をかざろう～』
水　島　賢　久

提言1　森町立尾白内小学校（3年生）
『駒ヶ岳を描こう』　**小笠原　博　子**

提言2　札幌市立澄川西小学校（1年生）
『いろいろいっぱい～楽しい造形活動～』　**福　島　由紀子**

司　会　者　函館市立港小学校
教　諭　**三　品　充　子**
助　言　者　八雲町立大関小学校
校　長　**竹　内　良　容**
助　言　者　函館市立神山小学校
教　頭　**東　堂　亮　之**
記　録　者　函館市立旭岡小学校
教　諭　**多　田　　淳**
記　録　者　函館市立神山小学校
教　諭　**小野瀬　真　理**

分科会討議の柱

◇個性，感性を育むための地域素材の教材化のあり方

1．授業に関する研究討議

（1）授業者から

◇　今回の題材は8時間という計画通りに行ったが，やはり時間的に厳しいものがあった。そこで，1学期の理科の授業で電気の分野を行ったので，そのまま材料を活用しようと考えた。しかし，実際に作業をさせてみると，子どもたちは電気部分を作るのはとても苦労していたので，材料の選び方や工作の進め方が今後の課題である。ただし，原理は簡単なものなので，いろいろな所に応用がきく素材である。

授業を行うにあたっては，子どもたちへの雰囲気作りに大変気を遣った。最終的には函館の夜景に参加するということで，次回は夜に集まって鑑賞して締めくくりたいと考えている。

今回，授業に取り入れる素材としては，みんなで考えられる話題を提供できたと思っている。

（2）意見交流

◆　紙コップを選んだ理由は。

◇　安価で調達が容易であること。野外展示という観点からすると，天候の変化に強い。そして，子どもたちが紙の加工に慣れていることから作業の利便性も考えた。実際にやってみると，中から光が透けて見えるのは良かった。欲を言えばもう少し強度があった方がいい。

◆　子どもはそれぞれ作品のテーマをどのようにして決めたのか。

◇　総合的な学習の時間で「函館の魅力」というテーマで学習しており，函館についてのイメージをしっかり持っている。また，学校に飾るということを第一目標にして，ロータリーの前の木に飾るということで制作した。そこから先は子どもたちの想いに任せている。

◆　材料を子どもたちに選ばせるときに，透明度という点ではどの程度まで言及したのか。

◇　飾るための素材はボール紙や画用紙，折り紙と透明なセロハン程度を考えていた。部屋を暗くして懐中電灯を紙コップの中に入れて光らせて，その効果を一度感じ取らせた。後は，子どもたちに自分で考えさせて材料を集めさせた。

◆　構造を理解して作るまでにどのくらいかかるのか。

◇　回路そのものは理科の時間に作った。図工としては2時間。

◆　授業計画では4時間となっているが。

◇　電池の組み立てや周りのカバー作りなどを含めて4時間である。

◆　色形に関わる面で，子どもの造形表現を高める手だての教師側の意識がどの程度あったのか。

◆　光の透過を試すお試しコーナーは，今日つくったものなのか，以前からあったのか。

◇　携帯の暗室は今日が初めではない。進度に差があるため，試しながら制作した子と初めて試して新しい発見をできた子がいる。

◇　暗い所で光らせるという意識が強く，外側に飾りを付けても見えないという想いが強い。明るい所で見せるという部分をもう少し意識させて制作に取り組めば，造形表現的に違った物もできた。

◆　題材として光を扱う場合，中学年としてどこまで掘り下げるのか。また，小窓は子ども達のかかわり合いを意識して作ったのか。

◇　明るいところで見て楽しい，暗いところで光ってきれい程度で考えた。のぞき窓は見て自分の参考にもなるし，声掛けの効果もねらった。

◆　光と動きと音が入ると子どもはとても興味を持つ。この授業で子どもはとても生き生きしていた。子どもの心を揺さぶるとても良い素材であった。私の場合モビールを使ったが，手先が

不器用な子どもでもとても興味を持って取り組んだ。視点の置き方で授業の仕方が変わってくるので，次のステップで系統性を出せる。

2．提言に関する研究討議

①〈小笠原博子先生〉　『駒ヶ岳を描こう』

（1）提言者から

- 森町民にとって「駒ヶ岳」は毎日の環境の一部である。日頃の様子から駒ヶ岳は尾白内の児童にとって身近であり，上手に描きたい存在なのだと感じた。
- 地域の題材を選ぶ際に重要なことは，児童の実態に合うことが大切である。
- 「上手に描きたい」という，児童の共通の強い願いをもって取り組めた。
- 途中で技能的な問題から手が止まることもあったが，友達の作品を参考にしたり，教師のアドバイスを受け入れ，「やってみたらできた」を繰り返して前向きに取り組んでいた。
- 活動後は自分の作品に対する強い想いを持つことができていた。
- 地域空間にあるものは全て教材化することができる。教師自身が地域に感心を持ち積極的に関わり合っていくことで，地域素材を見いだし，児童の実態に合わせて教材化していく柔軟な感性を磨くことが大切である。

（2）意見交流

◆　写生会を行うときは，外で絵の具を使って色を塗った方がいいのか。

◇　低学年はイメージで描くので，外では見て，さわって，色ぬりは教室に戻ってからやらせる。高学年はできるだけ実際に見せてその場で描かせる。

◆　先に先生が構図を教えたのか。

◇　遠近法など，子どもの描きたいイメージでの描き方を教えた。似たような場所で描いているが，たまたま子どもたちが同じ場所で描いた。

◆　写生が三年生に向いているのかという問題がある。大人っぽい絵になっている。形が単調で面白味の無い作品になっている。もっと違った題材の与え方が必要ではないか。写実的にではなく，どんな感じを受けたのか，どんな感じを表したいのかを伝える方が大切ではないか。

◇　子どもたちが望むことを優先した。自分が描きたい，表現したい駒ヶ岳に少しでも近づけるようにということで，こちらから情報提供やフォローをした。

②〈福島由紀子〉『いろいろいっぱい』

（1）提言者から

- 色を意識した造形遊びを年間を通してやっていこうと考えた。
- 蛍光色を使ったのは，混ぜても濁らず，子どもにとってインパクトのある発色の良さを持っているからである。
- つくって光らせたりすることが楽しさの実感となる。楽しいと思うと次の新しい表現活動につながる。
- 批判もあるが，同じ材料に何度もかかわらせることで子どもの成長を教師が実感でき，見通しを持ったカリキュラムの工夫により有効だと感じた。

（2）意見交流

◆　ブラックライトは何本必要か。

◇　普通の教室では八本使った。天井などに七本，お試しコーナーに一本。三本でもできるのではないか。ライトに近い方が発色がいい。

3．助言者より

◎　光と風を合わせた題材であり，子どもの興味・関心が高い。この題材がさらに発展していき，いろいろな学校で実践されるのを願っている。

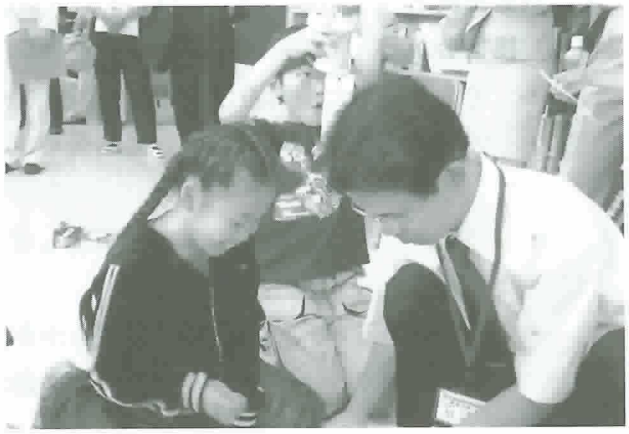
◎　感性とは，「大きいな」「きれいだな」等の受け身なものだけではない。例えば，石をさわっての感覚，函館の歴史を学んでからの感じ方など，地域素材は自分達の身のまわりにあるので，受け身の感性ではなく，能動的な感性による授業というのが子どもたちの喜びをあらわすことになる。

◎　造形遊びでは，子どもたちの活動場所を確保してあげることが大切である。また，金銭的な問題もあり，全校体制の協力が必要になる場合もある。

◎　造形活動は写実的なものだけではない。描きたいものへの想いがわかることが大切。身に付けた技術を使って，描きたいものが絵から伝わるように次につなげたい。

◎　造形活動では，個人の学びだけではなく，他者とのかかわりのなかで発展していくことが大切である。そういう学びを作りだしていくためには，教師の柔軟な発想が必要となる。

◎　教材化できる郷土素材の条件として，子どもの発達段階に合っていて，題材の目標を達成できる素材，子どもの興味・関心を高める素材，身近で入手が容易である素材，取扱が簡単である素材の四つが挙げられる。私たちの身のまわりにある素材をいかにして教材化していくか，それぞれの教師が考えていく必要がある。



4分科会 「くらしからのいざない」

授業 函館市立旭岡小学校（5年生）

「函館・元町・スローアーカイブス」 **山 田 光**

司会者 上磯町立浜分小学校
教 諭 **佐々木 善 憲**
提言者 大成町立平田内小学校
教 諭 **井 田 昌 之**
江別市立江別第三小学校
教 諭 **佐 伯 晶 宣**
助言者 大野町立島川小学校
校 長 **黒 田 雅 世**
函館市立西小学校
校 長 **野 呂 憲 一**
記録者 函館市立北星小学校
教 諭 **後 藤 博 子**
函館市立千代田小学校
教 諭 **久保杉 由 佳**

分科会討議の柱

◇地域素材を生かした教材化により，完成をゆさぶり子どもの変容を促すためには，どのような指導法がよいか。

1，授業に関する研究討議

（1）授業者から

◇ 子どもたちが非常に一生懸命頑張っていた。班によって完成時間にばらつきがあり，もう少し，5～10分程時間があれば完成するところまで見せることができたと考える。昨年度の取り組み「西部地区をこすりだしてみよう」という活動から今回の授業を考えた。高学年になると，自分の作品に対する観察眼が芽生え，図工への興味が薄れていく時期である。なぜ「こすりだしなのか」については，モダンテクニックの利用によって，うまい・へたの境が薄くなる。そのことにより，自分らしさを見つけ出し，図工に対する自信をつけてあげることができるのではないかと考えた。

なぜ「写真・絵・こすりだし」という三つの複合素材を取り入れたかについては，昨年度の実践でB4の紙を使用して製作した時は，模造紙を使うという考えに至らなかった。そして，元町らしさが足りない，何か物足りないという感想を持った。ただし，「ダーマトグラフ（アート鉛筆）」を使うときれいにこすりだしの模様が出るとわかったことは収穫であった。元町らしさを表現する具体的な方法として，写生会，元町の教会の絵，そのあと写真撮影，そしてこすり出しの活動を行った。隣のクラスでは，1時間程度で平面的なコラージュだけに取り組んでいた。自分でも初めはこれでもいいかと思ったが，やはり3つの技法を複合した方がよいと考える。地域によって，様々な特色があるとは思うが，他の地域の方でも生かしていただきたいと思い，今回の授業を行った。実験的な授業として一石投じたと押さえていただけたらと考える。

（2）意見交流

◆　今回の授業はこすりだしが中心だったと思うが，最近授業時数が減らされている中で，自分でも草花のこすり出しをやってみたいと思っているので，興味深く見せていただいた。非常にダイナミックなこすり出しをしていて，子どもたちも満足していたと思う。

なぜ，こすりだしだけでは物足りないと感じたのか？　物足りないと感じたのは先生なのか，児童なのか？　どの部分が物足りないと感じたのか？　を教えていただきたい。

◇　物足りなさを感じたのは教師側で，元町らしさが出せなかったという点。

◆　函館の歴史のある街をじっくり見つめようという視点もとてもよく，札幌に帰ってからも取り入れることができそう。総合や他の授業にも結びつく。いろいろな要素が含まれていたと思う。「元町の町並みからイメージ」という言葉が何度も指導案に出てきているが，子どもたちにどれだけ伝わっていたのか，どれだけ作品に反映にされていたのか？　どう評価していくのか？

◇　子どもたちが元町のイメージをまとめたファイルがある。今日は作業に夢中になっていて子どもたちはあまり見ていなかったようだが，そのファイルを評価の参考にしたいと考えている。ファイルには，自分のイメージをどれだけ生かせたかなども書かせている。

◆　函館，地元のよさを子どもたちがいつも感じとれる授業で，大変感動して見せていただいた。その中で，コラージュなどの技法が工夫されていた。ただ，三角形とサイコロは元町のイメージとどのように結びつくのか？

◇　積極的にかかわった子とそうでない子がいたように思う。サイコロを選んだ班は，上手くかかわっていない子がいたように見えた。しかし，大きなサイコロをつくった班では，どこを振っても元町のイメージが出るようにしたいと考えてつくっていたようだ。

◆　一人一人のこだわりや想いから出発していると思って見ていたが，グループ活動の中でそれをどう生かすかについて，個人の想いが埋没してはいなかったのか？　どのような形でグルーピングを行ったのか？　一人一人の想いをどう生かそうとしたのか？　また，この授業の中で，どんな力を身につけさせたいと思ったのか？　子どもたちの変容を先生は感じているのか？

◇　グループは，いつもの生活班を使っている。宿泊研修のグループ活動にも生かしていきたいという意図で，グループ分けをしている。グループでは個人を生かし切れないこともあるが，野外を歩いて活動する場面があるため，グループを作らざるをえなかった。中学校だと，個人ごとの活動もできるかと思うが，小学校５年生という段階では難しい。グループの中で上手く活動できていない子もいたが，やむえないと考える。グループで練り上げることによって，ついてくる力もあると考える。

◆　生活班としてつけたい力と，図工美術の教科でつけたい力は別だと考える。一人一人の思いが生かし切れなかったという部分に引っかかりを感じる。図工と他の授業とでは目指すところが違うと考える。生活班というグループで活動する中で，ファイルの中で埋没していった個々の思いもあったと思うし，反対についてきた力があるならば，それはどんな力だったのか？

◇　大きく４つの目標が指導案に出ているが，今回の授業で、図工美術の力がついていなかったかというと，自分はそうは思わない。生活指導等との関わりは無視できない。個人的な見解の違いかと思う。子どもたちの感想からも読み取れる変容があったと考える。他の方の意見も聞きたい。

◆　地域素材として街並みを取り入れているが，特色あるとらえやすい街並みであったと考える。「私の街にはこういう物はない」などの声もあり，函館は恵まれていると感じた。しかし，もう一度自分の街を見つめ直すと，何も特色のない街はないと思った。必ず「らしさ」が見えてくるのではないか，という提起にもなった授業である。

時数が減っている中、これだけのことをやっているのはすごい。図工教育の生き残りを考える中で，図工美術の枠にとらわれず，他の教科とのつながりの中で生きる力をつけ，自分のくらし

を豊かにできたという点では変容が見られたと思う。

個人的には，フロッタージュをサイコロや教会の形にまとめた作品よりも，大きな模造紙にフロッタージュのみでまとめた5年2組の作品の方に魅力を感じた。ポスターにしたり，足跡をつけるともっとよくなるのではないか。このフロッタージュのみの作品は，手を加えていないだけに素材を生かしてきっていると思う。手を加えたことにより，変わってしまった点もあるのではないか。

（3）助言者から

◎　共同製作ということに意味がある。共同製作においては大事なのは「過程」。作業自体に意味があると思う。目に見える作品という形でも最終的には残るが，作品をつくる過程において，他を認め合う時点で変容していく部分もある。取捨選択の中で，練り合いが見られ，力がつく。

時数が減っている中で図工の時間がとれない現状，現場では他領域との融合が進んでいるが，できるだけいろいろな時間の中で図工の力もつけていってはどうかと思う。その可能性を探っていく中で，肯定的にとらえていってはどうか。

◎　指導案を見た時点で，函館ならではの素材であり，校外活動であったりと，総合的なにおいを感じたが，子どもの気持ちを広げてくれる活動だと思った。今回のような斬新な授業の中でも，説明責任・結果責任もある。総合的な時間なども活用して力をつけていくことは大切であるが，共同製作をさせるにはそれだけの理由が必要である。作品の大きさは共同製作をさせる理由には結びつかない。一人一人に大きな作品を作らせることも可能である。そのような形でやれたらどうだったのか。製作の場においても，共同製作をする必要があるのかを児童自身に話し合わせることで，思いをより大きくさせて，製作に当たらせることもできた可能性がある。

2，提言に関する研究討議

（1）提言者から

提言1

「海からのおくりもの　～流木でシーソーをつくろう～」の実践より

大成町立平田内小学校　　井田　昌之

◇　地域素材として考えたとき，やはり「海」。実践内容としては，異学年の交流を深めるため，全校合同で取り組んだ。自分たちの手で形に残る物をつくりたいという思いを生かした。昨年度の総合的な学習で「海」をテーマにしたときの話し合いの中で，子どもたちから「遊べる物」という意見が出ていた。今年度取り組む中で，その意見を生かしてシーソーとなった。

低学年は飾り付け，中・高学年は本体と分担し，材料集めと製作に取り組んだ。5月に全員で漂着物集め。(資料参照)大きな作品には，昨年度にも一度取り組んでいた。

自然木にはいろいろな形があり子どもたちのイメージとは合わない部分もあったが，教師の働きかけで軌道修正や工夫をしながら，自然木の形を生かした作品づくりに取り組んだ。くぎとホットボンド以外は，自然物でないものはほとんど使っていない。完成後も，使っているうちに手すりや背もたれをつけたいという意見が子どもたちの中にわき起こり，材料を改めて拾ってくることもあった。

単に造形的なおもしろさから素材にアプローチするよりも，図工の時間に限らず，各教科・道徳・特別活動，総合的な学習の時間で扱った方が，子どもにとって印象深い内容を選択することが可能になると考えている。

＜完成作品で子どもたちが遊ぶビデオの視聴＞

（2）意見交流

◆　地域素材を改めて「教材」とするのは大変。その場所に移動することは，大変時間がかかっていると推測されるが，本当にこの時間内に収まっているのか。校区近くのトラピスチヌでなく，西部地区に連れて行くのは大変だと思う。函館は，観光資源などに恵まれている。自分の地域では，どのような地域素材があるかわからないが，可能性を検討していきたい。

◆　グルーピングをどのようにやったのか？　話し合いの中で，どのような意見が出ていたのかも知りたい。子どもたちの持つファイルも見たい。地域素材を生かしているのはとてもよいと思う。自分のいる地域では，思い当たる地域素材がない。やるとしたら，山田先生の地域素材に対する授業の視点が参考になった。（壁や街並み，石畳など）　やろうと思えば何か見つかり，できるのではないかと思う。デジカメ写真の活用もいいと思う。

貝殻などの接着をどうしたのか？　製作が終わってからも，材料を探したり飾りを足すなどの自主的な動きは見られたと推測される。子どもたちは，このような活動を喜んでやるのではないかと思った。

◇　貝殻は，ホットボンドを利用。

◆　ホットボンドの使用は，だれのアイディアなのか？

◇　今までもリースづくりの松ぼっくりつけや掲示板作りなどで利用してきたので，子どもたちの方から使うことを提案してきた。

近隣小学校との集合学習でも図工を予定。子どもたちから，近隣小学校にもつくってあげたいという意見が持ち上がっている。予定時間が2時間なので，骨組みだけ一緒につくり，飾りは相手の学校でつけるという形も考えている。

◆　資料を見て，つくりたいという気持ちが大切だとわかった。自分の経験でも，作品を製作する段階では喜んでつくるが，持って帰るのをいやがったり，完成させることに興味を示さない児童もいる。完成させていない子には，つくりたいという気持ちが足りなかったと感じた。

材料の選定も大事だと感じた。普通は，親が持たせた物を結局使わず持ち帰ったり，上手く組み合わせられない様子も見られる。何をつくりたいのか・どんな材料が考えられるかを教える授業が必要だと感じた。

◇　材料を選べるようになると，子どもたちの中からも様々な工夫が出てきた。材料集めも勉強のひとつと考える。どうしても上手く使えないときだけ，教師が助言した。

◎　「地域素材」はいくらでもある。提供できる物には，いろいろな素材がある。そのまま利用できない物については，過去の経験の中でコンクリートのかわりに水性ボンドと砂を混ぜるとよいことを子どもたちが見つけ出したこともあった。材料集めに関しては，例えば，遠足などを利用することもできる。地域素材がないと言うことは，絶対あり得ない。子どもが普段何をして遊んでいるか，何に興味を持っているか見取ることが大事。子どもの目線におりて探すと必ず見つかる。

◎　つくったものに愛着を持たないという現状に対し，教師は対策を講じなければならない。教師が，製作後にみんなで遊んでから持って帰るというセッティングをしてあげれば，愛着を持つようになると思う。そういう題材を選んではどうか。子どもの実態を見ながら，それを押さえて指導していくことが大事。

◆　作品を大事にする，愛着を持つ，持たせるという点が，刹那的な総合的な学習との大きな違いと考えている。図画工作の中には刹那的な題材もあるが，今回の山田先生の実践では，モニュメントという物はある程度飾っておける。佐伯先生の実践でも，シーソーは遊べることから，作品を大事にできる。そういう点では，非常に良い授業と提言であると感心して聞いていた。音楽や

図工は，人数が多いほど指導効果が高まるが，学年ごとの目標をしっかり持たせることも大事だと考える。

◇　低中高という３ブロックに分けた目標は持っている。中高・低中と一緒に組んで行うこともあるし，場面によって一緒に活動したり分けたりする。

◆　複合学年で活動する場合，どうしても下の学年が上の学年に引きずられやすい。下の学年で，どんな力がついたのかと思ったこともある。人数が少ないと言うことは，それだけ指導が大変な面もある。

◇　どこかで問題点の可能性は感じるが，なかなか気づかない部分もある。

提言２

「あすかの森へ～学校の窓～」の実践より

江別市立江別第三小学校　　佐伯　晶宣

◇　国際化・情報化の波の中で，足下や身の回りを見つめることが大切だと感じている。家庭・学校・遊び場・友達の家など，身近な環境が大事。本校校舎には煉瓦が使われている。全国でも数少ない円形校舎。４００人程度中規模での古い学校として地域にも親しまれている。その隣にある「飛鳥の森」は，身近な遊び場でプールもある。木や草など，四季を通じて様々な変化がある。

教師の願いとしては，以下の３つのポイントがある。

＊地域環境に目を向けてほしい。

＊第三小学校にもっと愛着を持たせたい。

＊他の子と比べるのではなく，自分なりの表現や想いでやってよいことを知らせたい。

この活動は，学校をきれいに明るくしたいという子どもたちの想いと教師の呼びかけからはじまった。具体的には，みんなの好きな飛鳥の森を学校に再現する形での取り組みを考えた。

まず，飛鳥の森を知るため，現地でスケッチをした。森のイメージを持つことにより，様々な表現方法が子どもたちの中から出てきたが，教師の側に最終的には窓に絵を描かせたいという思いがあり，提案したところ，子どもたちも意欲をもった。

森を描く前に，１時間アンリ＝ルソーの絵の鑑賞の時間をとった。（「サルのいる熱帯の森」「異国風景」の２作品）子どもたちは「おもしろい」という反応を見せた。その作品は実際の景色ではない。植物園でスケッチした植物のイメージからふくらませて構成して描いたのであろう。

初めに，表現の自由つまりその人だけの「リアル」があるということをルソーの絵の鑑賞を通して知ってほしかった。それと同時に，自分たちにも「リアル」があり，これから表現する作品が自分たちの森なんだということを知ってほしかった。

次に，グループごとにし下絵の製作に取り組んだ。初めはグループで１枚選ばせるつもりだったが，校長からの助言でグループの中で埋没する子の可能性を指摘され，一人一人のイメージをつなぎ合わせて作品に取り入れるようにした。製作中，低学年からの賞賛を受けたり，自分たちもやりたいという声も上がり，想いが広がっていった。窓に描くと，大変きれいに発色することに気づいたことが発見だった。他にも，筆よりも刷毛の方が描きやすいこと，刷毛の先を生かして草を描く，指で描くなどの新しい表現を見つける子も出てきた。また，子ども達だけでなく，他の先生方の声かけも励みになり，際だった集中力を見せた子もいた。最後に記念撮影をして鑑賞した。

教材化に当たって，刹那的な作品で消さなければならなく，写真で記録は残せるが，持って帰るなどの付加価値がない作品になってしまったことが残念である。

（2）意見交流

◆　窓にビニールを貼って描くのは良くあるが，窓に直接絵を描くというのも非常によいと思う。ルソーの「森」を鑑賞させたのもよかった。画材は何を使ったのか？

◇　ネオカラーを使った。アクリル絵の具では，消えなかった。

◆　自分で描くことも楽しいが，他の学年の子から評価されるというのも意欲につながってよい。自分だけでなく，人にも楽しみを与えられるという点が良かったのではないか。外に発信していけるという活動だったと思う。

◆　ずっと残しておけない作品については，「これはいつまでの作品」と予め期限を知らせて作品づくりに取りかからせる方法もある。その場合，経験それ自体が子どもたちの宝物になるのでないか。カラスを描いた子どもの活動や満足感，映像で見た鑑賞する子どもたちの生き生きとした様子が印象的で，とてもよい活動だと思った。どの子も本当に満足して活動を終えたということがわかる。このような思いを子どもたちにもたせることが，非常に大切になっていくのではないか。

◆　地域性は，流木や西部地区でもそうだが，造形課題をどうするかが問題。造形課題の解決だけでなく，人間的な高まりという視点でも考えるのが大事だと思う。窓に何を描くかを地域とつなげているところが素晴らしい。教師として，自分の学校を愛する気持ちを育てて行かなければならない。そのような思いをまた次の学年につなげていくことが大切だと思う。こうして，教師の中にしっかりとしたねらいがあれば，図工は成功すると思う。残らない作品であれば，その点も子どもたちと話し合っていくことも大事。そうすれば，子どもの方から製作過程の様子を記録として残してほしいなどという意見も出てくるかもしれない。

作品に必ずしも残るとは限らないし，残らないならばどうするか，子どもたちにどうしてほしいかを教師の方から投げかけることも大事。ただ作品を返せばいいという時代ではない。子どもの作品をどう返すかは，まだまだ奥が深い問題である。

◆　この授業を見て，イメージをつかませることに成功したと感じた。自分の経験で，無人島の絵を描かせたことがある。人がいない等の説明をしたが，ホテルが建っていたり，ポケモンが戦っている作品も出てきてしまった。子どもたちにイメージをつかませることの重要性を感じた。

◆　地域と言うことで話されたが，ロシアの日本人学校で，文化そのものを学ばせるために民芸品づくりに取り組んだことがある。カリキュラムの作成に取り組んだ結果，日本とロシアの共通点を発見し，日本文化の再発見につながった。マトリョーシカは日本の民芸品から伝わったらしい。他にもある。文化のつながりを感じる。ものづくりを通して，文化を見つめ直すことができた。

（3）助言者から

◎　山田先生の授業は，地域素材は都市部にはないという人もいるが，その考えに一石を投ずる授業だった。井田先生の提言は，極小規模校のデメリットに目を向けていたからこそできた，極小規模校の強みが発揮できた素晴らしい実践だったと思う。

佐伯先生の提言は，子どもの考えが伝わる実践だった。教師がその時間，子どもにどんな力を身につけさせるのかが明確になっていた素晴らしい実践だった。子どもが一人一人めあてをもって取り組んでいた。

子ども一人一人の感性を大切にしたい。教師の思いと子どもの思いは離れた所にあるのではない。教師は，子どもの思いを大切にする責任がある。子どもの感動はどこにあるのかを意識し，子どもが納得して取り組まなければ，よい変容は見られないのではないか。

ある子どもの親から，絵を習っているのに賞に入らないのはなぜかと問われたことがあった。現代では，こういう観点でこのような評価で選びましたと説明しなければならない時代となった。

◎　全て内容の濃い授業実践だった。地域素材に絞った内容が精選されていて，大変よかった。変容ということに関わっては，教師が子どもの感性を揺さぶる素材を用意する責任がある。教師がまず感動していなければ，子どもにも変容は見られない。

時数の制限はあるが，時間的余裕があれば材料体験を促す時間を設けることが，子どもにとって造形的な力を身につけることができる。そのことから，いろいろな可能性が生まれてくる。材料体験から迫っていくという方法もある。いろいろな材料の中から，ふさわしい物を選ぶ力を育てたい。

指導と評価の一体化については，指導内容がきちんとして，何を伝えたいかはっきりしていなければならない。そのことは，作品にも反映され，子どもの満足感を得るためにも必要である。心を拾うことができるというよさが図画工作にはある。図画工作は，一人一人の子どもの可能性を探り，育てていくことができる教科である。

これが，図工の大きな側面であると考える。普段の授業実践がこれからもとても大事になっていくのであろう。今後，造形要素とともに，人間性や心をも育てていけるということが，将来的に図画工作の時間数も復権できる大きな可能性になるであろう。

5分科会　「ひとからのいざない」

授　業　函館市立赤川中学校（2年生）
『田辺三重松に学ぶ』　　**齊　藤　悦　子**

提言1　旭川市立春光台中学校
『対話を通しての鑑賞』　　**庄　司　展　弘**

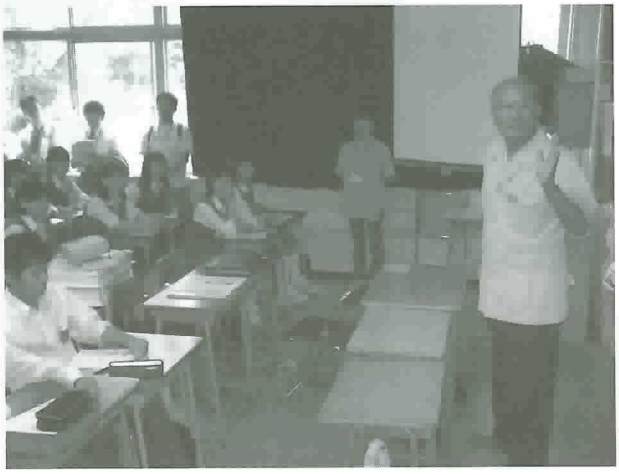
提言2　北海道教育大学附属養護学校（中学部3年）
『ありがとうのプレゼント』　　**宮　城　亜紀子**

司　会　者　函館市立戸倉中
教　諭　**笠　松　英　治**
助　言　者　教育大学函館校
助教授　**佐　藤　昌　彦**
助　言　者　札幌市立東米里小中
校　長　**寺　嶋　文　憲**
記　録　者　函館市立桐花中
教　諭　**花　岡　康　成**
記　録　者　函館市立桔梗中
教　諭　**阿　部　真　琴**

分科会討議の柱

◇身近な「ひと」を取り込む授業の工夫について

◇想いを引き出す授業展開について



1，授業に関する研究討議

（1）授業者から

◇　美術館によく足を運び，教材研究を行ってきた。函館の美術館では毎年「田辺三重松展」が開催される。詳しくは知らない画家だったが，時代の流れによって絵の描き方が変わっていることなどを知り，鑑賞の授業で深く掘り下げてみたいと思った。鑑賞の授業ではゴッホやピカソなどヨーロッパの画家を取り上げることが多く，それらはどちらかというと受動的な鑑賞であった。そこで今回はそのような鑑賞ではなく，函館にゆかりのある作家を取り上げ，子どもたちに調べさせる「能動的な鑑賞」の授業に取り組んでみることにした。鑑賞にあたっては，まず８枚の絵を何の情報も与えずに提示した。最初，生徒はそれらが同一人物の作品だとは思わず，各自が素直な言葉で第一印象を語った。田辺三重松に関する資料が少なく，生徒に与えた資料も中学生には難しい内容ではあったが，いつも教科書で扱っているものよりも身近な題材だった。生徒がどのように考え動き吸収していくか不安だったが，調べて発表することで理解を深められたようだ。ゲストティーチャーの三箇三郎先生が来られた時には，生徒はとてもびっくりし，また感動していた。田辺三重松と直接関わった人が話をしてくれたことによって，より身近に感じ，そして感慨深いものとなった。話す内容も，画家としての生き方に関わるもので，大変勉強になったと思う。今までの鑑賞の授業とは，生徒の印象や感想は違うのものであった。

（2）意見交流

◆作品の調べ方は具体的にどのようなものであったのか。

◇美術館から借りた本を用いた。なるべく資料・説明がたくさんあるものを選んだ。コピーして各班に渡し，分担を決めてまとめた。

◆班活動でしっかり発表できていることに感心した。また，考えをまとめている最中でも自分の感想をすぐに発表することができる。このような取り組みは以前から行ってきたのか。また，それは他教科とも関わっているものなのか。

◇国語の班新聞（夏休み課題）や総合学習などで，このような活動形態を取り入れている。学級でも普段から班を主体に活動させているので慣れていると思う。

◆生徒はのびのびと取り組んでいてよかったと思う。自分たちが調べて発表するという活動形態は前年度から続けられているものなのか。また今後も続けていくのか。

◇美術では調べ学習は初めて。１学期に宿泊研修（総合学習）で江差の調べ学習を行っている。受け身的ではない鑑賞を，少なくとも，各学期にひとつはやりたい。

◆ゲストティーチャーは，生徒に対するインパクトが大きくてよい。知識中心の鑑賞ではなく，体に染み込むような鑑賞であったと思うが，今後の発展性について考えを聞きたい。

◇人物を掘り下げていきたい。人物の想いや生き方・気持ちや心情というものに重きを置いていきたいと考えている。

◆各グループからの発表が進むにつれて生徒の真剣さが増していった。中学生のときに学ぶか学ばないかで親密感がかなり違うと思う。今までの鑑賞を削ってこの題材を取り上げたのか。それとも新たに加えたのか。また，支援という面ではどうか。

◇他の題材の内容・密度を少し削って，この鑑賞の時間をとっている。支援という面では，班の中で教え合ったり支え合ったり，またリードしたりすることができる。他教科（体育など）との連携ですでにそういうスタイルができている。

◆本物（ゲストティーチャー）に触れたことはすばらしい。学習によって絵に対する見方や感じ方が第一印象からどのように変容していくか，それを今日の授業の中で見ていたが，作品を調べている中で生徒は変容していったのではないかと思う。このような授業では，生徒の発表力（コミュニケーション）の力は大きいし，培っていくことが大事だと思う。

◆生徒にとって記憶に残る授業だったと思う。他の作家の作品を見るとき，今日の取り組みのようにいろいろなことを考えて作品に触れようとする生徒も出てくるのではないか。

◆有名な絵だけではなく，身近な作品から入っていた方が親しみやすいものがある。

◆生徒を引きつけることに関して題材がよかった。授業の進め方もよく勉強になった。

◆調べ学習から入る取り組み方とゲストティーチャーの登場はよかった。身近な題材・生の声（三箇先生）によって，自分たちのビジョンも見えてくるのではないかと思った。

◆鑑賞は，今まで得意分野・好きな作家を取り上げることが多かった。地元の作家を今一度よく見つめ直したい。ワークシートも参考になった。

◆今日の授業で，教師の熟達・成長ぶりをよく知ることができた。

◆つくるのは苦手だが見るのは好きだという子も多いので，鑑賞は大切だと感じる。この授業を他の題材にどうつなげていこうと考えているのか。

◇２学期はドライポイントを予定している。テーマは「空想の世界」を考えている。この鑑賞での「想い」を生かせたらよいと思う。

◆生徒がグループ毎にきちんと発表していた。その発表の流れもよかった。班活動の指導や苦心はどのようなことか。

◇興味のある絵はどれか班で話し合って決める。文章の読み込みが苦手な子もいるが，班内で配慮や気遣い・助け合いがある。

◆美術の授業時数が減っている。多感な中学２年生では，学級経営をしっかりしていないと1時間の授業は難しい部分もある。そういう意味では，今日の授業はゲストティーチャーを迎えたこともあってよかったと思う。

◆授業への入念な準備はすばらしい，生徒もよく調べていたと思う。郷土に根ざした題材で，「調べる・発表をする・発表を聞く」という取り組みがよかった。ただ，借り物ではない生徒自身の言葉がもっとあればと感じた。 資料の整備は，調べ学習では大事である。三箇さんの「感謝の言葉」が感銘的だった。道徳教育的な側面もあったと思う。

◆教師の顔・表情を見て，普段から誠実な授業をされていると感じた。盛り沢山の内容だったがよく進められていた。時間が少し窮屈だった感がある。生徒は「読む・書く・聞く」がよくできていた。総合学習的な要素・関連もあった。すばらしい授業だった。

◆作品から作家の生き方を調べようとする試みがすばらしい。生徒同士の質問・応答の場面があればさらによかったと思う。

◆地元作家は意識的に強く引きつけるものがある。「資料が少ない→資料を作ろう」というスタンスから取り組んでみるのはどうか。即効性のある授業ではないが，将来，函館の作家に興味を抱くようになってくれると思う。

◇資料は図書館で見つけたものだけだった。田辺三重松の資料は，三箇さんのアトリエにたくさんあった。もっと早く気付けばよかったと後悔している。次回は生徒に生の絵で見てもらえればと思っている。

◆実技はアレンジがしやすい面があるが，鑑賞は苦手なものがある。班活動での評価ポイントはどういうところか。

◇発表後の感想記述を読めば反応がわかる。また，発表内容が皆に伝わっているかという点も考慮している。

◆絵の背景を調べさせる方法やゲストティーチャーはよかった。生徒が「自分の心で感じたところは…」というところまで持っていければよいと思うが，そこまではやはり難しいだろう。総合学習・道徳にも通じるものがある。読み込み・理解が生徒自身の言葉になっていないものもあったと思うが…。

◇読み込みが自分のものになっていない感想もあるが，それは致し方ないと考える。生徒それぞれの受け止め方も違う。

◆資料が少ないと，表面的な言葉の羅列や薄い発表・理解に陥ることも少なくない。別のアプローチの仕方を考えていくことも必要かと思う。

2．提言に関する研究討議

（1）提言者から①

◇　鑑賞は，情報を与えないことからまず始める。（但し，作品によって絵のサイズなど必要な情報は提示）絵にはいろいろな見方があり，例えば同じ１枚の絵でも，悲しい絵・思い出の世界・希望の世界など様々な見え方がある。そのことを互いに発表し合うことで，意見・考え方が変わる場合もある。作品をどう受け止め，どう感じ味わっていくかが大切である。作品の選定として，気づきがわかりやすいもの・また，その要素を多く含むものを選ぶようにしている。板書ではキーワードを残すよう工夫している。「いろいろな見方がある。正解はない」それでよいと考え取り組んでいる。

◆評価に対する観点はどのようなものか。

◇自分なりの考え方・結論・より深い考えがなされたか・見い出してくれたかどうか…という点。

◆表現力が十分ではない生徒もいるかと思うが，どう取り上げ配慮しているのか。

◇話せる生徒・書ける生徒はよいが，どちらも苦手な生徒に対しては正直難しいものがある。

◆２年目になる鑑賞の取り組みだと思うが，生徒の変化はどうか。

◇作品にもよるが，感想や想いを書く量・発言が増えたりした。鑑賞の時間を楽しみにする生徒も増えてきた。

提言者から②

◇　養護学校という性質から，美術＝余暇として位置付け，日々の生活に潤いを持たせられるよう努めている。今回は，日常生活・身近なものへ目を向けさせ「お世話になっているおじさんやおねえさんを知ること」を授業のポイントとしている。　　～授業の様子をビデオで鑑賞～
人とのつながり・「ありがとうシリーズ」は今後も続けていくつもりである。

◆制作したうちわの色や模様はどの程度指導されたのか。
◇色や模様は生徒が各自で選んだ。見本を見てできる子にはそれから選ばせている。
◆見本を使用するとしない子との差が大きいと思うが。その辺はどういう指導をされているか。
◇様々な生徒の実態がある。その子に合った見本・指導法を選んでやっている。
◆その子を育てるために美術をどう活用しているかという印象を受ける。目標の与え方（～のために～しよう）が生きていると思う。「ありがとうの気持ち」が，生徒の心的成長に役立ったことはどのようなことか。
◇自分とのつながりを発見させることができた。プレゼントをするときにその相手の役割（自分との関わり）を知ることができた。

（2）助言者から

◎「なぜ鑑賞か」という点を軸に話したい。美術・図工は表現教科と言われ続けてきた。子どもの心を育てるためには表現（作る）だけでよいのかという疑問・考えから，鑑賞の重要さがクローズアップされてきたが，知識的な鑑賞だけではなく，体に染み込んでいく鑑賞も重要だと思う。「鑑賞から迫る」ことを重視して取り組むことも必要ではないだろうか。そうした鑑賞と表現によって美意識の構築がなされ，価値観が形成されていくと考える。

折り紙という教材があるが，折り紙では体に染み込むような鑑賞ができる。１枚の紙から何千何万通りの折っていく組み合わせがあり，その広がりから無限の可能性を引き出すことができる。そうした体で覚える美意識を，私たちは無意識のうちに身につけてきた。

「対話を通しての鑑賞」では，知性を高めることも大切であると感じる。言葉と言葉の対話によって，鑑賞の質・中身がかなり高まる。日本の美術館・学芸委員は何かと忙しいが，外国の美術館は仕事の役割分担がしっかりできており，鑑賞の環境としては恵まれている。美術作品の複製を各学校に配り，事前学習を行った後，美術館に見に行くスタイルもある。

「ありがとうのプレゼント」は，北海道・日本だからできる造形教育である。「作る行為」を通して自然・人に感謝する心に気づく。それはアイヌの心の根底にも通じるものである。

◎　地元の作家が取り上げられゲストティーチャーが登場する授業は，インパクトがあった。鑑賞の大事な要素は，表現能力を高める・感じ取る力を高める・文化を理解することにある。しかし，評価においては表現重視の傾向が見られ，このままでは美術という教科の意味が正しく理解されなくなるおそれがある。評価において鑑賞のウエイトを見直していくことも必要かと思う。

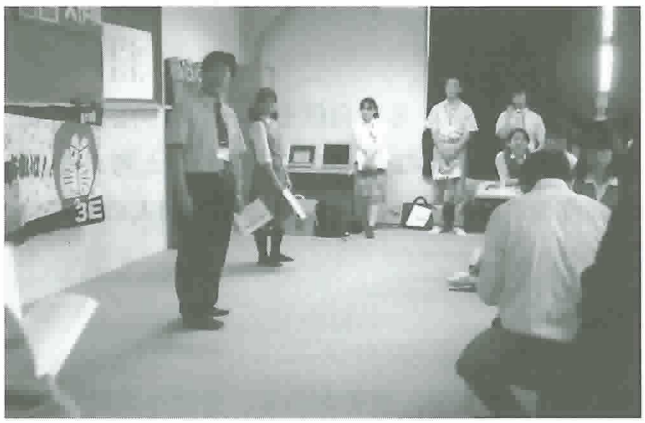
鑑賞においては，なんらかの形で子どもにキーワード・ポイントを与えることが大切である。それが，作品から何かを探そう・見つけようとするアクションを喚起するためのきっかけとなる。そのため，プレゼンテーション能力というものも求められてくる。グループ活動になれば，プレゼンテーションもしやすくなるし，一人ではなかなか興味が持てない題材であっても，協力し合える仲間がいれば取り組みやすくなるという利点もある。

6 分科会　「ものからのいざない」

授業 1　函館市立的場中学校（3 年生）
『なまら函館PR大作戦』　　**佐々木　壮　一**

提言 1　知内町立知内中学校（2 年生）
『身近な自然のよさを考えること』　　**後　藤　征　秀**

提言 2　滝川市立江陵中学校（1 年生）
『廃材（角材）でつくる』　　**鎌　田　俊　博**

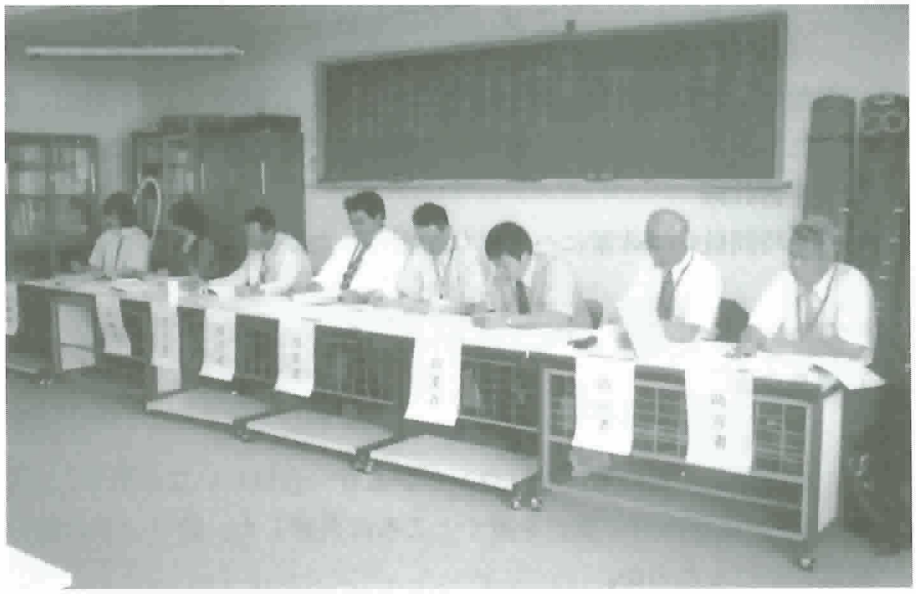


司　会　者　函館市立本通中学校
教　諭　**赤　坂　嚴　男**
助　言　者　厚沢部町立館小学校
校　長　**大　島　道　夫**
助　言　者　旭川市立桜岡中学校
教　頭　**川　合　　薫**
記録運営者　函館市立潮見中学校
教　諭　**長　峰　詠　子**
函館市立亀田中学校
教　諭　**米　田　康　子**

分科会討議の柱

◇　**地域素材をどのように生かしているか**

◇　**個性を生かした授業の工夫**



1，授業に関する研究討議

（1）授業者から

◇　コンピュータを題材としたアニメーションについて

5年ほど前から，どのようにコンピュータを授業に取り入れるかという観点で取り組んできており，今回の公開授業はその集大成となる。コンピュータを使うことによって生徒たちは興味関心を持つ。配色に戸惑いを持つ生徒もすぐに消したり変更が手軽にできるので，抵抗が少ないというメリットがある。一方で，簡単手軽なためにアイデアを練らないなどソフトに頼りがちになるため，アイデアに重点を置いて指導している。

◇　コンピュータの道具としての特性について

動画の「動く」という部分が道具としての特性ととらえている。

◇　指導の重点

テーマを函館とし，シナリオを書く部分とパソコン操作の習得に重点を置いている。力を入れているところは基本部分の押さえをしっかりすることで，アイデアはもちろんパソコンの操作に慣れることで生徒の自信につながり個性を生かすことができる。

◇　鑑賞について

友達の作品から学ぶことが制作のプラスになるととらえている。自信を持ったり再認識したり，負けたくないという気持ちが意欲につながり，個性にもつながるのではないかと考える。

共同でもいいですかという生徒の中に，共同作業をすることで自信がついて個人の制作に向かう生徒もいて，グループ作業の大切さも感じた。

鑑賞は，個性につながる手段ととらえている。

◇　地域素材を生かす取り組み

函館をアニメーションのテーマとした。函館には誇れる風景，歴史がある。身近な素材だが，どのように自分の作品に，いかに生かすのか，構想をふくらます部分に力をいれた。インターネットで調べさせるとイカ，夜景，五稜郭が多く，ダイレクトなイメージの生徒が多かったが，星→（変化）→五稜郭のように，アニメーションの特性である「変化」を大切にする生徒が増えるようになった。夜景の日８月１３日を画面に入れるなど，「生かす」というのは自分たちで展開を考えるところで葛藤したところかなと思う。

◇　「いざない」について

「はこだてからいざなわれているか」については，評価カードの感想に「すごい。」「みんな函館がすきなんだな。」「PRになっていたし，感動した。」など、函館をもう一度振り返った生徒たちが多かったので，最終的に函館にいざなわれたのではないかと思う。

◇　学習計画

６時間扱いで非常にハードな学習だったが，生徒たちはよくがんばった。

（2）意見交流

◆　施設が整っている。パソコンがひとり一台はいいなと思う。

◆　企画・構想部分に重点を置くところに共感した。絵コンテの部分で具体的にどうしたか，いかに声かけしたのか。

◆　地域素材「函館」について
　なぜインターネットなのか。身近にある函館像を自らデジカメで撮ったりすればいいのではないか。
◆　フラッシュというソフトを使っていると思うが，すぐやり直しができるので，もっと発展できるのではないか。

◇　構想はコンピューターに向かってではなく机上で取り組ませた。
　①　４コマまんがにしてごらん。（シナリオの起承転結）
　②　アニメーションは展開することがおもしろいんだよ。（支援）
　　（例）　星→五稜郭（形の変化），８．１３→夜景の日（文字の変化）
　③　何回も絵コンテを返した。
◇　インターネットを使わせたのは，シナリオ（構想）ができた時点で画像が必要だったから。

◆　インターネットの画像は自分自身で見た函館像ではないのではないか。

◇　大きい部分での情報提示しかできなかったので，今後取り入れていけるのではないか。
◇　５時間目の最後に何人かの作品を紹介した。そこから発見があって，残って手直しをした生徒もいた。６時間目の自己評価を見ながら，あと１時間手直しの時間があってもいいのかなと思った。

司会：評価は必ずしも最後の時間であつかわなくてもよい。

◆　地域素材について
　素材には木材などの材料と，手に取れない，見てさわれないものがあるが，どうか。

◇　生徒は地域素材を羅列する。どう生かすか迷いながら，アニメの原点に戻って，「おもしろさとは何か」から展開に持っていった。調べて素材をふくらませた部分はあるが，自分の思いをふくらませてもよかった。

◆　地域素材を生かすということについて
　身近だから本質がわかるし，生かせる「函館の子だからこそ」という部分と，身近すぎて関心を持たない，見逃すところに目を向かわせるというのがある。情報の収集の意味をはっきりさせ，インターネットは使わない方がよかったのではないか。

◇　向かうところは「函館って好きだな」
　おもしろいという感想が多かったので，制作をとおしていざなわれたのではないかと思う。
◇　ネットの検索であっても自分たちの想いが入っているのではないか。
　　（例）　ラッキーピエロがすき，誇れる夜景，五稜郭

◆　概念くずしが必要ではないか。
　たとえば「昨日の夕日，きれいだったんだよな。」と言うことで，「もっと気づかせる」ことができるのではないか。函館のイメージが，全国どこでも同じというのはどうか。

◆　あえて目を向けさせる部分はできたかな。
◆　鑑賞をとおして情報化され，先生によってまとまって一本化された。
◆　「DVDくれるの？」
　作品への思いはあるが，他の人にも見せたいという思いはあるのか？
◆　鑑賞の時点でパソコンはコミュニケーションツールとして扱えるが，どのように考えるか。

◇　鑑賞は自分の作品を振り返る，友達のよさを見つける場として考えているので，パソコンの活用は考えていなかった。
◇　モニターに出さないとわからないので，やり直しを繰り返すことが大切ではないか。

◆　パソコン画面をプロジェクターで映しているが，生徒は画面を一方的に見ることになる。普通，あーだよね，こーだよね，という「声」がない。一点を見ているようで個々がバラバラではないか。学校の「集団としての学習」を生かしたい。

司会：「函館が好きだ」が伝わってくる。
司会：自分の手で，肌でさわった函館をやってほしい。
司会：アニメーションは総合芸術なので，音やセリフも入るとおもしろい。
司会：シンボルマークのように，学習を幅広い表現活動につなげていくとおもしろい。

◇　6時間扱いという切迫した時間でやっている。音声を入れることについておもしろいのはわかるが，時間内の活動として必要最低限だった。できれば取り入れたい。
◇　「函館」を、生で感じる機会を増やしたい。

司会：コンピューターを学習に活用している実践についてどうか。

◆　班分けしてアニメーションをやっている。ねらいはコンテの部分に重点を置いている。
◆　抽象立体を架空空間に置いている。

◆　学校祭のステージ装飾を全校で制作するときのドット画を作らせる。生徒の作品を分解処理している。

◆　借りてきた写真ではなく，デザイン化したアニメーションはめずらしい。1・2年生でのデザインの実践はどうしているのか。

◇　写真の処理は1年生でさせたことがあるが，技術面は開発していない。技術，総合，家庭で覚えるなど，力を借りた授業になる。

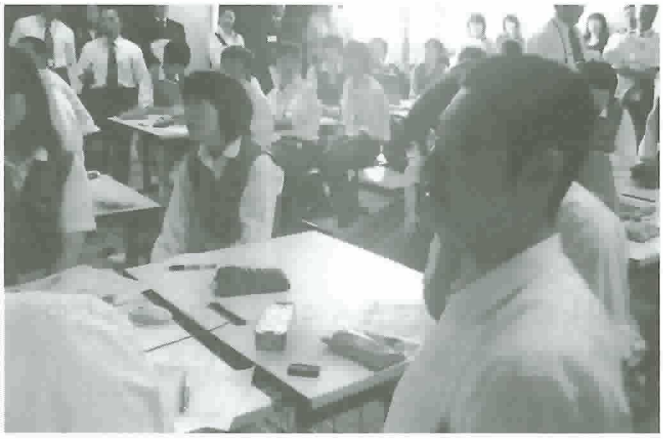
司会：1・2年生段階のパソコンの操作は技術科や小学校，総合などで取り組んでいるが，よくできたと思う。

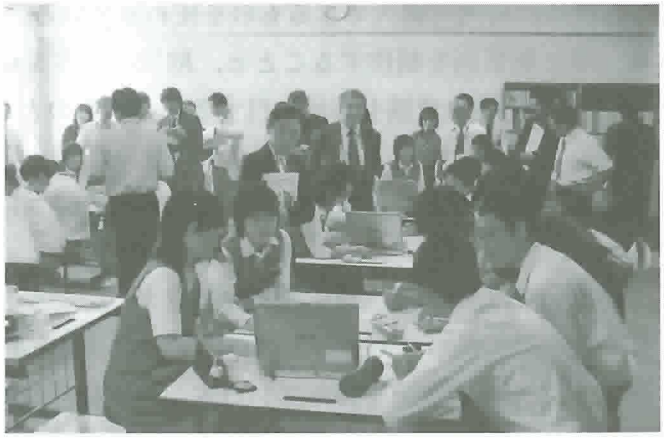
◆　構想面を大事にしたということだが，生徒になげかけた条件は何か。

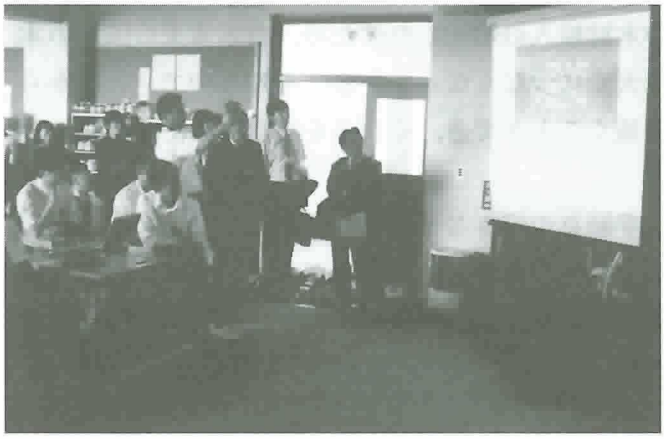
◇　ワークシートをもってくればよかったのだが，ダイレクトなメッセージを発想や自分の想いとしてどう展開していくかということで，「関連づけれる形・数字・文字から始めなさい。」というのが条件で，パターンやバリエーションは生徒の選択である。

◎　時代は変わった。限られた時間で力をつけるのは，大変だがやっていかなくてはならない。6時間扱いで学習したということ，6時間の中で子どもたちが始めて作ったアニメーションで表現できたことの素晴らしさ，絵に抵抗のある子が楽しんで作ることのできた取り組みの大事さを評価したい。

◎　PR大作戦ということで，大人であれば「知ってるよ」だが，子どもにとってはああなるのかなと思った。地域を見直す時間を確保するという難しさもある。







2　提言に対する研究討議

（1）提言者から　その１（後藤征秀先生）

◇　本校の生徒たちは日常，川や海で遊ぶなど，自然と親しみ地域と触れ合って生きている。しかし，残念ながら，自然への尊敬の念を持ち，自然を自分の宝として感じるところまでは想いが及んでいないように思われる。そこで身近な地域の良さを再認識してほしいという気持で，この題材に取り組んだ。

まず生徒たちに知内のどこがよいのかについて考えさせた。具体的には知内川，火力発電所の煙，潮騒橋，名物として，牡蠣，韮，マコガレイ，北島三郎，また北島三郎の生家の三郎ハウスなどがあげられた。さらに知内らしい風景の中のどのような点を絵にしたいのか，そのためにはどのような工夫をしたらよいのかについて考えさせた。最終的には緑の山々の良さ，空気の美しさなどを表現することによって，地域の良さを味わい創造する喜びにつなげたいと思った。

その際工夫した事柄は，１水彩画への抵抗をなくすこと，２風景画についての意識付け，３水彩画描法の工夫の三点である。（授業者資料参照）

自らの感動を自らの方法で表現できるという経験を積み，それを乗り越えた生徒は「絵を描くことは楽しい」という気持を持つことができる。だから我々教師は，生徒一人一人が自らの課題を主体的に解決する手だてを考える必要がある。

今回の実践での反省点は生徒全員の，こう表現したいというニーズに応えきれなかったのではないかという点である。これから以降も教材研究に努めていきたいと思っている。

（2）意見交流　その１

◆　画材はどのようなものを使わせているのか。

◇　簡単に町内で購入できるものを使わせている。特別画材にはこだわって指導はしていない。

◆　単に風景画を制作することと，地域の良さを見つけだそうという意識を持って制作をすることでは生徒の意識も作品も自ずと異なるものとなる。このはじめの意識づけがとても重要である。

◇　水彩画の技法の発見よりも，先に知内の良さについての話し合いをもたせたのは適切な順番だったと思う。

（3）提言者から　その２（鎌田俊博先生）

◇　この度あつかっている実践の中で，生徒たちに最も知ってほしかったのは，日本の文化の中で古くからの歴史を持っている木という材料の良さである。

木造の家屋は日本の自然に適した材料であるせいもあり，丈夫で美しく長持ちである。しかし，戦後の住宅ブームのため，山林からの無理な切り出しにより国内の山林が減少したり，さらには貿易摩擦の解消のため熱帯雨林からの木材輸入の増加したのため，日本本来の国産の木材が生徒の目に直接，塊としてふれることは大変に少なくなっている。そんな中で，エゾからマツの木材のあまりを，建設会社からただで頂くことができ，それらを材料にして木材についての認識を深めていった。

塊の木を使わせることには，木のにおい，手触りや堅さなど木の性質が生々しくわかるという良さがある反面，塊を切るだけで時間がかかってしまうという欠点がある。そこで大きな切断だけは教師が行うようにした。また制作課題は何を作ってもよいのだが全く自由な課題とすると，むしろ生徒が迷ってしまうので，「飾りたいもの，使いたいもの」に限定した。彩色等

には木の目の良さを表現できるポアーステインを使用させた。（その他提言資料参照）

美術という教科の限られた時数の中で，このように時間がかかる課題を扱うべきなものか，また中学校でわざわざ扱うべきものであるかどうかという点には迷いもある。しかし，材料の持つ良さを味わえる授業にこれからも挑戦していきたい。

（4）意見交流　その2

◆　大変に時間のかかる課題であるが，技術の時間と連動させてはどうか。

◇　今まで，木棚の形作りは技術科で，表面レリーフは美術でやったり，表札作りのレタリングは美術科で，彩色は技術科でなど，二つの教科で扱った課題もあった。しかし，技術（特に木工）の専門の先生方が減っている今，木工関係の課題を二つの教科を連動させて扱うのは難しい。

◆　提言資料（8ページ）にある積層の課題と，木材を塊として扱う課題では，指導目的，指導内容として矛盾していないか。

◇　塊の木材を彫る制作には，なかなか思い通りに作業が進まないというストレスが伴うが，むしろそれが木という材料を知ることにつながる。しかし，わざわざ塊の木材から板状のものを掘り出そうとする生徒もいるため，薄い板や空洞作りが体験できる積層にも挑戦させた，また一枚板が天然木材からとれる限界もあることであり，自分は必ずしもベニヤ等の加工材の有効性を否定しているわけではない。

◆　放っておけば捨てられてしまうしかない廃材が，思い入れのある木工作品へと姿を変えていく提言内容は見事だと思う。しかし，地域に関わりのある材料を制作材料として使うことで本当に子どもたちの中の地域への思いは変わったのだろうか。自分の実践の中では子どもたちの意識まで変えることができなかったように思う。もし本当に子どもたちが変化したのだとしたら，どのような点が変化したのかをお尋ねしたい。

◇　制作中，不要になった木材のかけらは修理に使うためポリ容器にとっておくようにしていた。そのかけらのがだんだんと小さくなっていった様子から材料，木材を大切に扱う気持が感じられた。地域で生産されるエゾカラマツ材に対する価値観の変化ではないだろうか。

（5）助言者から　その1（河合先生から）

◎　佐々木先生の授業から，学級経営の確かさが感じられる。これからの世の中，コンピュータを絵の具のように，画材のようにどんどん利用していくことが可能であり，利用していってよいものである。しかし著作権の問題も含めて，コンピュータを使う上でのルール作りを教師が行うべきである。

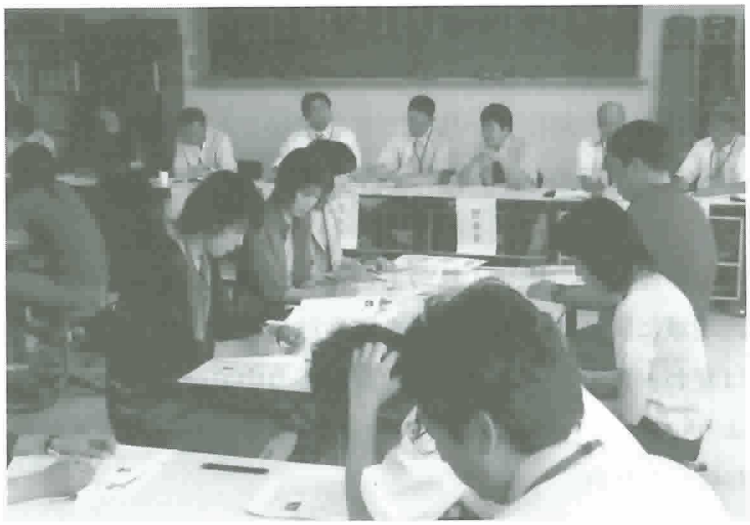
◎　後藤先生の授業の中にあったように，絵の具という材料についての基本的な指導は，絵の具嫌い，ひいては美術嫌いを増やさないためにも様々なチャンスに授業に織り交ぜていくべき内容である。しかし，後藤先生の提言された課題については，１４時間扱いでは時間をかけすぎではないか。

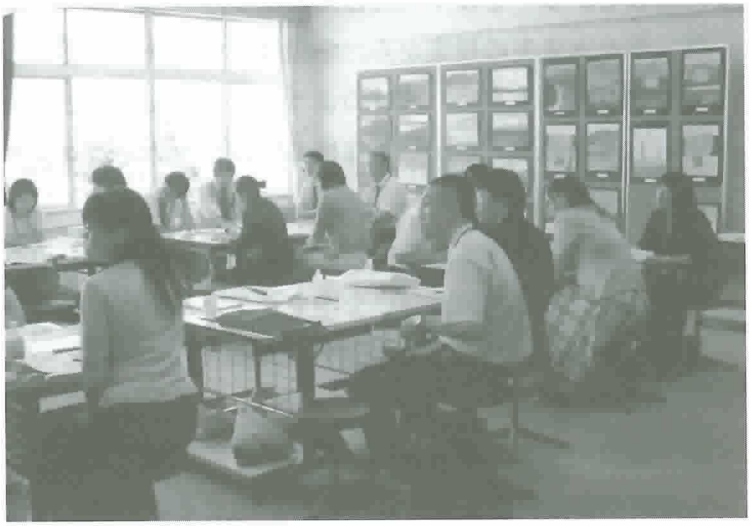
◎　鎌田先生へ。市販の美術教材には，手軽で安直なものがあるが，今回の木材加工のように，身近にある材料を見つけだし，利用することはことは大切である。また今回のように転勤のため現物の作品がないような場合でも，また失敗作品であっても写真で資料を集め残しておくことが有効である。

（6）助言者より　その２　（大島先生から）

◎　檜山地域には美術の専門の教師がほとんどいない。そして美術の教師の減少傾向は全道的な流れである。そのような悲しい現状の中ではあるが，美術の教師が本日のように集まり，学習し合うことには大きな意義がある。美術という教科は人にとってなくてはならない感性を磨く大切な教科である。にもかかわらず，美術の授業時間数は減少がくり返され，将来的には指導科目から消滅してしまうかもしれない現状である。

我々はその流れを覆すためにも美術を通して子どもたちをいかによく変化させていくかに着目し，子どもたちにざまざまな思いをさせ，題材と格闘させ感性を磨く教科，美術科の教師として頑張っていこう。





7分科会　「くらしからのいざない」

授　業　函館市立銭亀沢中学校（2年生）

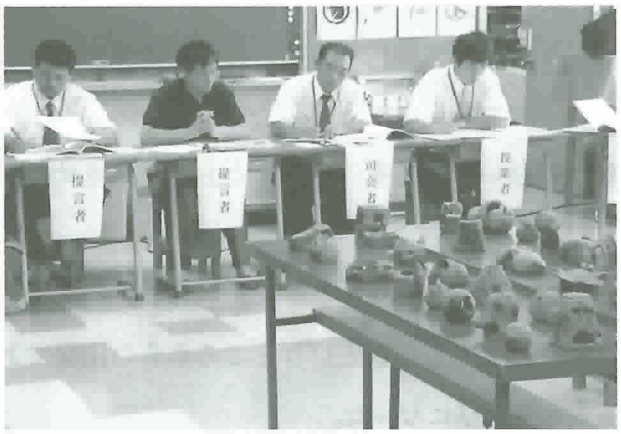
『縄文の灯』　**九千房　政　光**

提言1　函館東高等学校

『防火ポスターの制作』　**三　浦　　薫**

提言2　美幌町立北中学校

『造形教育　美術の世界reliefに酔う』　**玉　造　　至**



司　会　者　函館市立湯川中学校
教　諭　**仲　井　靖　典**

助　言　者　函館市立北中学校
教　頭　**中　村　吉　秀**

助　言　者　別海町立豊原小学校
校　長　**煤　賀　克　文**

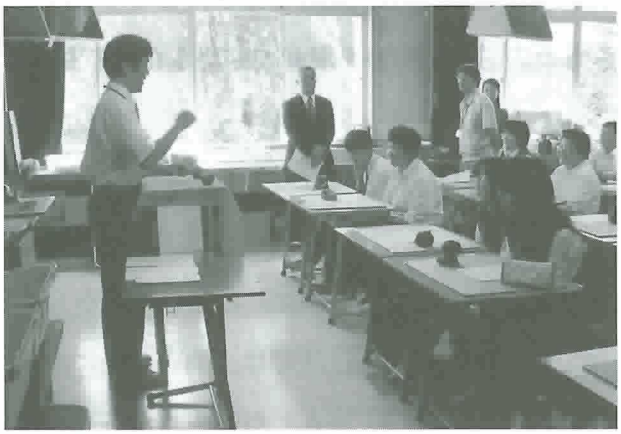
記　録　者　函館市立北中学校
教　諭　**三　谷　龍　司**

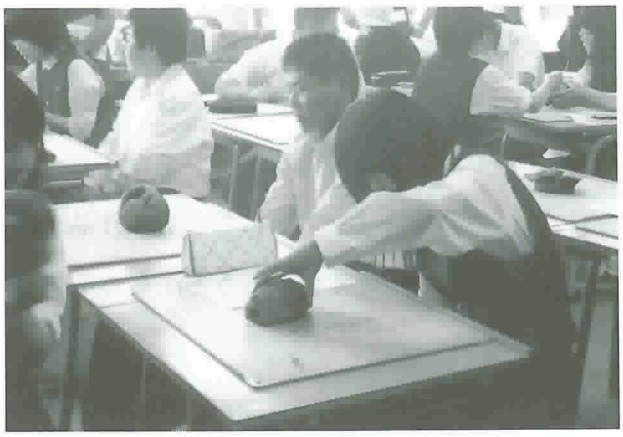
記　録　者　教育大学附属函館中学校
教　諭　**冨　尾　　拓**

分科会討議の柱

◇地域空間を生かした造形活動と自己表現について

◇中・高の現状について





1，授業に関する研究討議

（1）授業者から

◇　題材を決定するまでに色々と迷ったところはあるが，この地区（函館市銭亀沢）は，周囲からよく縄文時代の土器が出土することもあって，それをヒントに縄文時代の人になりきって土器を制作したらどのようなものができるのかとういうことをテーマに授業を行った。

◇　授業に入る前に地域周辺の土を色々と採取して，どれが土器の制作に適しているかを調べ，自分で焼成し，最終的に学校付近の砂利場の土を使用して，生徒とともに土づくりを行なった。

◇　１時間では困難であるので，３時間連続で授業を調整してもらい，形づくりを行なった。

◇　焼成は炭による野焼きを，土・日曜日に行ない，生徒も自由参加した。

◇　形作りに関しては，縄文土器をつくるのではなく，縄文時代の生活，自然などをテーマに制作させた。

◇　本時は鑑賞の時間であり，特に視点を設けずお互いの作品を「見ること」を徹底させたが，他の色々な鑑賞法を聞きたい。

◇　生徒たちはとてもリラックスして楽しそうに取り組み，自由な発言も多く出た。

◇　今回は地域の土を使って本当に器をつくることができるのかというところからの出発であったので，この授業は生徒を含めて，私自身も大きな喜びになった。

（2）意見交流

◇　江別でも「煉瓦」という地域素材を生かした制作をさせていて，その困難さはよく分かるが造形に使い易い粘土はとはどのようなものと考えているか。

◆　つぶが小さく，粘気の強いものと考える。実際に周囲の土を採取してみたところ，同じ場所でも層によって質が違っている。また，よりきめの細かいものを混ぜて使用したものもあった。

◇　「シャモット」とはなにか。

◇　一度焼いた粘土を粉状にしたもので，それ以上収縮しないものなので，粘土に混ぜて焼成するのに使用される。

◇　今まで，教材として用意した粘土しか使用したことがなかったので，身近な地域から直接粘土をとり，使用させるのは，実に生きた授業であったと思う。技法では，焼成の時にアルミホイルで包むのはなぜか。また，どういう状態になったときに「焼き」が完成したことになるのか。鑑賞は，生徒にお互いの作品を自由に鑑賞させ，カードにそれぞれが感じたことなどを書いて貼らせていくとう方法もある。

◆　アルミホイルを使用したのは，作品をいれるマスにつかないようにということと，十分蒸らすためと考える。

◇　アルミホイルは，焼きあとがまだらになることがあるので，アルミの粉末などがかえってよいのでないか。

◇　アルミホイルは，作品同士がついたりするのを防いだり，また，焼いたときに破裂した場合他の作品の保護と考える。

◆　「すみ」を使用したわけは，長時間高温のまま維持できると考えたが，その場合大きい送風機が必要である。

◇　ランプシェードを粘土でつくらせようと考えているが，ただつくらせるのではなく，また，縄文土器をつくらせるのではなく，縄文の人になって作らせるという発想，想像性が素晴らしい。「灯り」ということでろうそくを使用した点もよい。器から漏れる自然な光の空間についての考えはどのようなものであったか。

◆　土器をつくったあとのことも考えて，使えるものとして，また家でも飾って楽しめるものとしてランプシェードを制作させた。土器なので，自然ともれる灯りにも注目させるようにした。

◇　縄文土器と弥生土器との違いが生徒の作品に，より鮮明に表れていた。力強く，素朴な感じの作品が多く，感心した。

◆　授業の導入段階で縄文時代について調べたり，ディスカッションさせたりして，テーマになるキーワードをどんどん出させた。

◇　今回の研究会に関して，主題と題材についての困難さはなかったか。

◆　「くらし」という言葉から色々と考えていったが，地域の歴史から掘り下げ，土器が出土されるということからも，自分たちによる土器の制作，そのことによる新たな発見という点に着目した。

◇　今回の授業のヤマ場はどこと抑えているか。また，鑑賞シートに生徒はどのように書いているか。

◆　やはり，ろうそくを灯すところであると考える。電気を消して灯りをともしたときに生徒から出た歓声は本物の感動であると考える。

◇　生徒の感想を見ても，そのようなことが多く書かれているので，本時の目標は達成されたのでは。

◇　一つ一つの作品の灯りもよいが，全部の作品に火が灯ることによって，大きな塊としてより美しさや感動が感じられた。

◇　誠実さが感じられる授業であった。授業前に自分で採取，製作する中で自分で分かったことや分からなかったことを曖昧にせず，生徒にしっかりと伝える姿勢は大切である。教材研究にかける情熱はとても素晴らしい。

◇　研究主題を正面から捉え，生徒としっかりと向き合った授業であった。また，ろうそくの灯りの揺らめきも非日常的な美しさを感じさせるものであった。

（3）助言者から

◎　今大会のテーマに基づいて，「地域空間へのいざない」を美術教育にどう生かしていくかということを考えさせられる授業であった。以前は「地域」という言葉「中央」に対する言葉でいわゆるローカル色が強かったが，いまでは生活様式も変化し，どの地域も同じような店舗ができ，同じような空間で生活をし，景色・風景までそれほど変わらなくなっている。「ひと」「もの」「くらし」というテーマの中では「くらし」がいちばんイメージしずらいテーマであると考えるが，銭亀沢という土器が出土される風土にあわせて，よくテーマに沿ったものであったと考える。技術的なことなどでは，中学校2年生ということを考えると若干幼いと感じる点もあるが，それらも含めて良い雰囲気の授業であった。

◎　今の時代の中で，地域の素材を生かしての制作，野焼き，ろうそくの灯りなど普段目にしたり，体験することのないことに取り組んだことは非常に生徒たちにとって意義がある。「心の教育」ということもあわせて，とても素晴らしいことと感じた。

◎　平成9年に野焼きを実際に公開したが，「やきもの」は偶然性があることがまた面白い。地域の素材を使用し，時間以外の中での授業に対する姿勢もとても素晴らしい。他の地域での「やきもの」についてもどうであったかと考えさせられる授業であった。

2，提言に関する研究討議

（1）提言者から

○提言者1より

◇　地域の消防署と以前より連携して，防火用ポスターを高校選択美術の時間に制作させている。

◇　視覚伝達デザインとしての効果，また歴史的に火災に対して縁の深い地域であることなどをしっかりと考えさせ，時間をかけて取り組ませている。

○提言者2より

◇　地域の施設などの装飾を美術部の活動に位置付けて取り組ませている。

◇　文化ホールロビーの壁面装飾，文化祭での舞台作り，工場の壁面など地域にある空間を利用するという考えである。

◇　地域の人たちとのかかわりを考え，廃材利用による立体制作や，「ねぷた」の凧づくりなども取り組んだ。

◇　1年ごとの作品制作なので，連続性には欠けるが，地域の人たちとよりかかわり，作品を鑑賞していただいている。

（2）意見交流

◇　技法だけではなくポスターのコピーライトに関して，どのように取り組ませているのか。

◆　プロのコピーライターのドキュメンタリーを見せるなど，実際の宣伝の工夫を授業でも取り上げている。

◇　視覚伝達のひとつとしてＣＤジャケットを制作させているが，どのようにしたら効果的な構成をさせることができるか。

◆　高校生になると，中学校で指導された技法などが身に付いている生徒が多く，よりよい構成をと自然に考えている。指導というより，助言程度にとどめている。それによって生徒の方から色々と意見が出てくる。また，過去の作品も例として提示している。

◇　このポスターの配色に制限はあるか。色調が強すぎるものもあるようだが。

◆　色彩についての指導はするが制限はない。伝達としての手段なので強い色は多くなるのではないか。ただし，今回のポスターのテーマとなると色づかいの難しさはあると考える。

◇　本地域には高等学校の美術の教員がいないので，中学校での指導で生徒は終わってしまうのが惜しまれる。

◆　年間にかなりの時間をさいて指導しているが，早く完成した生徒の扱いと，何年も取り組んでいる中で統一して指導していることは。

◆　早く完成した生徒については，より完成度の高いものをつくらせるため助言をしたり，他の製作をさせたりしている。生徒には授業時間内で完成させるように計画・指導をしている。レタリングについては必ず手描き，もしくは，手で描いたもののはりつけとさせている。

◇　毎年壁面装飾などしているが，以前の作品はどのようにしているのか。

◆　基本的には廃棄している。地域に呼び掛けて，引き取ってもう場合もあるが，焼却，廃棄というケースがおおい。生徒には写真に撮ったものを配布しているが。

◇　凧づくりにはどのような工夫がされているか。

◆　地域にいる実際の職人さんのところへ行き，絵の具なども本物を使わせていただいている。また，制作した凧は文化祭の時に実際に飛ばした。

◇　廃材を利用して球体を制作したが，強度に問題はないか。

◆　フック，アンカー，ねじを使用しているのでかなり丈夫である。

3，助言者より

◎　本大会のテーマ，主題に沿った授業，提言であった。

◎　授業者の人柄が非常に良く出ていた授業であった。生徒も授業者とともにとても良い雰囲気

の中で活動していた。鑑賞の授業としては，生徒間の対話がもっと取り上げられると，さらに深まりがみられたのではと考える。

◎　地域の公的な空間に表現していく実践は，自分たちが住んでいる地域と深くかかわり，場所や「ひと」を愛する気持ちを強く育てていくものになると考える。

◎　生徒が表現しているものをしっかりと見つめ，とらえていくといった，我々指導する側の姿勢が必要である。また，表現を受けいれながらも，基礎・基本をしっかりと取り組ませることも重要である。

◎　地域から学校へ，学校から地域への発信となっているかかわり方が今後も必要であろう。「くらし」からの呼びかけ，発信というこれからの指針も感じられた授業，提言であった。

大会速報

55 HAKODATE 2005·7·28
速報
第５５回全道造形教育研究大会
函館大会 No.1

めざめる感性（こころ）きらめく個性（かたち）
「地域空間がいざなう造形活動のひろがり」

第５５回全道造形教育研究大会函館大会
実行委員長　藤　川　　潔

漆黒の津軽海峡に漁り火がともり、街の輪郭を浮かびあがらせる光あふれる街、歴史とロマンの街、訪れる人々の絵心詩心歌心を刺激してやまない街、ここ函館で第５５回全道造形教育研究大会が開催されるにあたり、道南の地を代表してごあいさつ申し上げます。全道各地からご参集の皆様、ようこそのお運び、ようこそ函館へ、心より大歓迎申し上げます。

さて、矢継ぎ早に進む教育改革の流れは、平成十年の「生きる力、ゆとりの確保、総合的な学習の時間」を打ち出した学習指導要領改訂から、教育改革国民会議の「教育を変える１７の提案」、「学びのすすめ」、ゆとりから確かな学力の向上を目差す学習指導要領一部改訂と強調点を移しながらも子どもの人格の完成を目指すという本筋に沿って進んできております。その中で、造形教育は豊かな情操を培うという人としての根幹を育成する役割を担っています。

美しいものに感動し、創り出す喜びを味わう、それはどんなに科学が進歩発達しても人間だけが為しうるものと考えます。一人一人の感性（こころ）がめざめ、きらめく個性（かたち）となって表われる、人間性を互いに尊重できる子どもたちを育てましょう。自分の住む地域を知り、見詰め、そこから受ける様々な刺激を感じ取り、その良さを感受することが地球を大事に、人を大事にする心へとつながります。未来の社会を担う子どもたちに豊かな情操を培う、造形教育の有り様を探る論議が沸き立つよう期待しております。

第５０回大会以来五年ぶりの函館での開催です。渡島美術教育研究会、檜山造形教育研究会の全面協力を得て、総力で取り組んでまいりました。本大会を通して、造形教育の価値や意義、素晴らしさを社会に向けて発信できる良い機会となるよう願ってやみません。教育への熱意情熱を存分に発揮してくださるようお願いします。

＜研　究　部　より＞

大会テーマは，「めざめる感性（こころ）きらめく個性（かたち）」です。感性（こころ）とは，美しさや心情，夢，希望，憧れなどとともに，興味・関心・意欲・態度を含め，感性をより多面的におさえ，「こころ」ととらえました。個性（かたち）とは，子どもが題材・材料・地域から受けた刺激によって，「感性（こころ）」がめざめ，そのイメージ独自の手法で，創造的に創意工夫し，その結果を表出させたもの，あるいは表出に至るまでの一連の行為とおさえ，個性を「かたち」ととらえました。

研究主題は，「地域空間がいざなう造形活動のひろがり」です。子どもたちにとって身近な環境としての地域空間に焦点をあて，そのよさや美しさに気づき，感動するような造形活動を展開することにより，より一層感性を磨き個性を伸長することができるのではないかと考えました。　　（柿崎雄二）

55 HAKODATE 2005·7·28
速報
第55回全道造形教育研究大会
函館大会 No.2

「授業者から一言」について

函館市立的場中学校　佐々木壮一

今回の授業は、コンピュータによるアニメーション作りです。アニメーションのおもしろさは、形や数字などが予想もつかない展開で変化していくところにあります。函館をテーマとしたモチーフをいかにストーリー展開させるかが、制作の過程で大事なポイントとなります。制作中はコンピュータ操作にとまどう場面も最初は見られましたが、さすがは吸収力旺盛な生徒達。どんどん自分のものにし、それぞれ個性的な作品を作っていました。操作を教えただけで後は黙々と生徒が作品作りをする様子を見て、指導する立場よりも「どんなものが一体できるのだろう！？」という期待感がいっぱいです。当日は、作品発表となりますが、自分たちの思いをのびのびと表現し、参観された方にも少しでも楽しい様子が伝わればと思います。

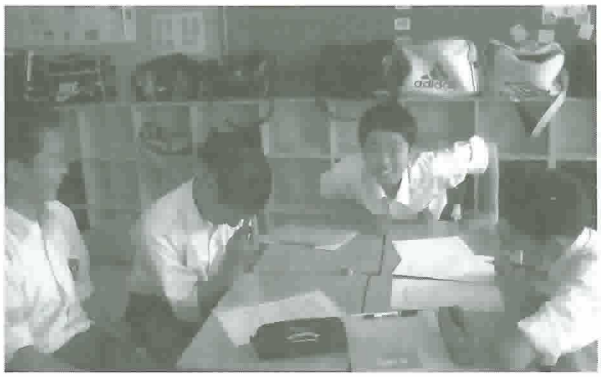
授業者より一言

「授業者からの一言」

函館市立赤川中学校　齊藤　悦子

グループで鑑賞の授業に取り組ませたり、教科書に載っている人物以外の作品を鑑賞させるのは、初の試みです。この題材に取り組むまでは、私自身も身近な芸術家について何も知らなかったので、生徒が初めて鑑賞授業でゴッホやピカソを紹介される気持ちは、こういうものかと思ったりもしました。

最初に観た田辺三重松の作品の感想が、作者の表現の変容や生き方、時代背景を調べることで、生徒たちの「感性（こころ）」がどのように変化するのか楽しみです。また、どれだけ探求できるのだろうかと不安もありますが、この学習をきっかに、これから生徒の作品に対する見方はきっと変化していくと思います。



55 HAKODATE 2005·7·28
速報
第55回全道造形教育研究大会
函館大会 No.3

「授業者からの一言」について

北海道教育大学附属函館幼稚園　　小林恵理子　中山利広　太田洋子

題材名「うみだ！　うみだ！」

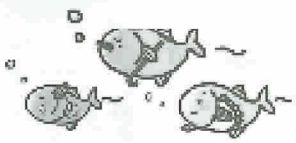
♪うみだ～うみだ～♪…子どもたちは広くて大きな海、きれいな海、そこから「海」の中の魚などの生きものやヤシの木、コンブなどの植物、海に関連した乗り物など一人一人がイメージした海の世界を友だち同士、クラス全体で展開しています。「海」の世界を造り上げていくにあたり、日常の保育において各クラスがいろいろな素材に触れて造形活動を進めてきました。

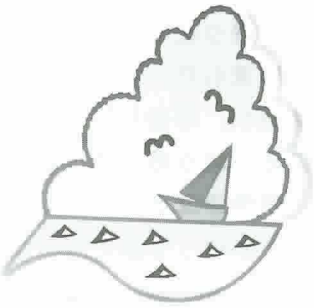
３歳児クラスでは新聞紙を使い、ビリビリと破いたり、丸めたりしてボールやヨーヨーを作りました。その経験をもとに、今度は新聞紙を赤いつや紙を使って包み、タコを製作しました。吸盤には王冠を使って工夫しました。

４歳児クラスは絵本「にじいろのさかな」に興味をもち、発泡スチロールのトレイに思い思いに着色したり、ホイル紙やテープを工夫し、それをうろこに見立てて段ボールの土台に貼り、動く魚を作りました。

５歳児クラスはペットボトルをつなげてガムテープで固定し、協力していかだや帆船を作りました。帆の部分にはカラーポリ袋を用い、画用紙で作った旗を掲げ、年長組のダイナミックさが表現されました。

当日は一生懸命に製作したこれらの作品も「海」の中に飾られます。また、各クラスの子どもたちが製作したもので、友だちとかかわりながら、生き生きとダイナミックに遊びを展開する様子を参観していただきたいと思っております。





55 HAKODATE 2005·7·28
速報
第55回全道造形教育研究大会
函館大会 No.4

ものからのいざない　『光と風のハーモニー　～またたく光で夜をかざろう～』

函館市立駒場小学校　水島　賢久

今回の授業では風を受けることで発光する“風灯”を製作し，身近な環境を飾るという活動に取り組みました。作るという行為そのものを楽しむのはもちろんですが，“自分たちの作ったもので夜景に参加する”というところが特に重要だと思っています。

夜景とは，そもそも人々の暮らし（営み）によって生み出されるものです。自分たちの作った作品で夜を飾り，函館を代表する観光資源である夜景に参加するという活動を通して「美しいと感じる心」や「身近な環境に積極的に働きかけ，より豊かにしていこうとする心」を育てることができると考えています。身近な環境に働きかけ，より豊かなものにしていくことの大切さやよさに，子どもたちなりの視点で気づいていくためのひとつのステップになることを望んでいます。

そのためにも目的意識をしっかり持つため，導入部では特に時間をかけ，「なんのために」「どこを」「どのように」という部分をしっかりつかみ，製作へのイメージをふくらませていきました。

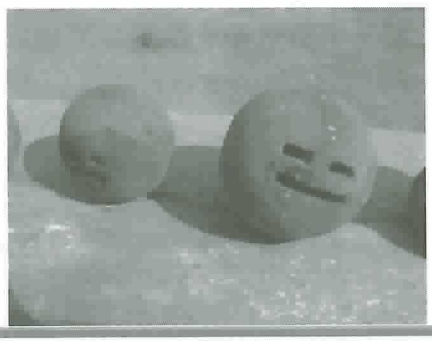
今回公開するのは，子どもたちが待ち望んでいた点灯実験の部分です。いよいよ自分の風灯をつるし，風をあててみるときの，子どもたち一人ひとりの動き，つぶやきが一番の見所になると思います。

授業者より一言

函館市立銭亀沢中学校　教　諭　九千房　政光

野焼きをやるのはこれが初めてです。始めは本当に面倒くさい気持ちのほうが割合として大きかったです。しかし、実際に野焼きをしてみて、はまりました。

子供たちは実際に土を採りに行って焼き上げるまでを体験しました。土をいじることに何も抵抗を示さず、本当に楽しそうに創作活動をしていました。粘土は近くの砂利採石場の地層部分から採取しました。同じ地層でも場所によっては粒の大きさが違ったりして、子供たちは粘土選びも楽しそうに行っていました。また、野焼きの作業も体験し、その火力に圧倒され、感動していました。まさに体当たりで制作をしているという感じでした。



野焼きは奥の深い魅力を秘めています。準備は大変ですが是非やってみてはいかがでしょうか。

55 HAKODATE 2005·7·28 速報
第５５回　全道造形教育研究大会
函館大会　速報　No. ５

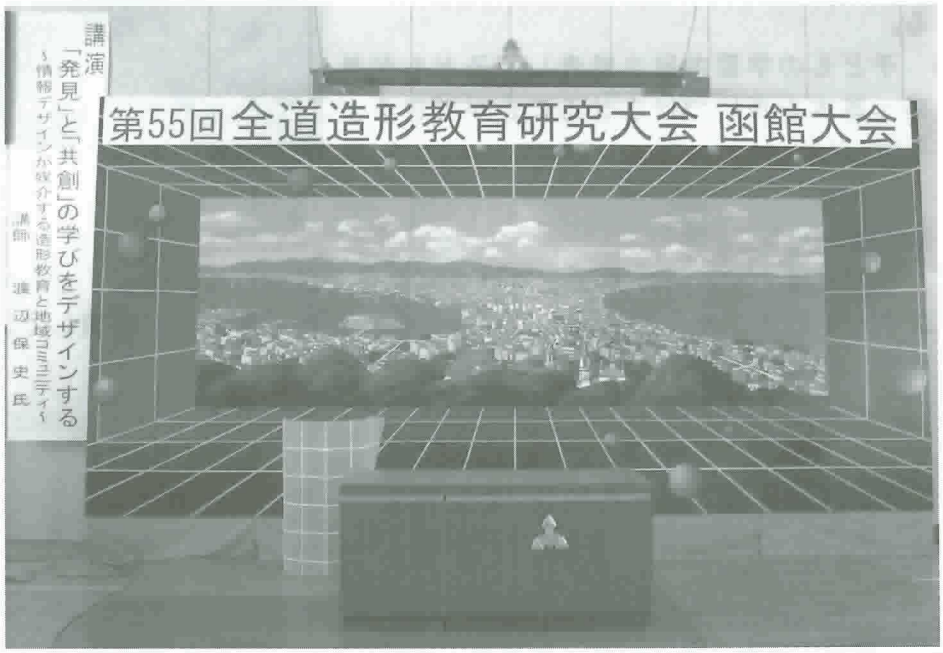
函館・元町・スローアーカイブス

分科会「くらしからのいざない」

函館市立旭岡小学校　山田　光

函館で最も異国情緒を感じさせる元町地区を題材に，歴史的建築物の絵や写真，そして坂道や壁などのこすり出し（フロッタージュ）などを「ゆっくりと時間をかけて表現しようという作品作り（スローアーカイブス）」という発想で捉え，再構成して行く事により元町の町並みが持つ異国情緒や独特の雰囲気を，再現できるような授業が出来ればと思っています。

全道造形研函館大会全体会場



55 HAKODATE 2005·7·28
速報
第５５回全道造形教育研究大会
函館大会 No.6

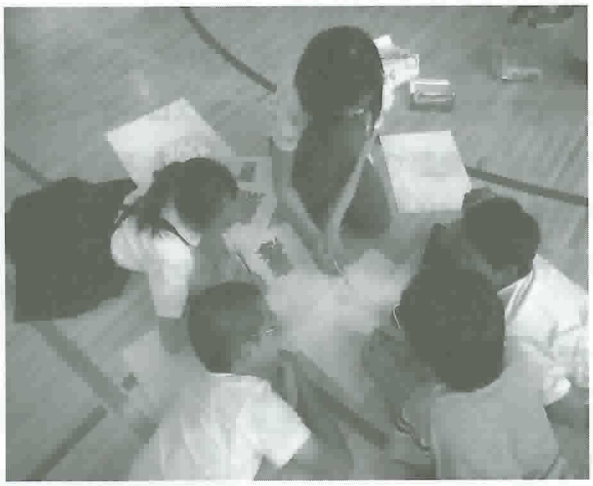
授業の見所　「わたしたち街づくりデザイナー」

函館市立昭和小学校　西館　純
教育大学附属函館小学校　楢山　聡

＜本時の概要＞

「グループで作成しているポスターの下描きを完成させる」ことを目標に，グループで色のぬ　り方や組み合わせ方について，試行錯誤しながら下描きを完成させていく。

＜本時のアピールポイント＞



① ２つの学校の子どもたちが合同で授業を行う。(「ひと」からのいざない)

② 子どもたちが目標に向かうために，「合いことば」(インパクト，ぬり方，組み合わせ)を設定し，それを，子どもと教師の評価規準とした。

③ 本時のグループの活動を予測し，「支援計画」をたて，それに基づいて授業を展開する。

④ 子どもの学習内容を精査し，子どもが基礎・基本を身につけさせることができるようにした。

＜授業者から＞

子どもは，テーマに対する思いや願いを「自分たちの主張」として意識し，それをポスターとして，色，図柄，レタリングにこだわりをもって表現している様子をご覧ください。

函館・渡島・檜山　児童生徒美術展

■日時　７月２７日（水）～２８日（木）　■場所　函館市芸術ホール　ギャラリー

第55回全道造形教育研究大会「函館大会」の開催に合わせて、函館・渡島・檜山の各小中学校より約６６０点の作品を展示しました。(平面が約600点、立体が約60点)

どの作品も、児童生徒の思いがしっかりとつまった努力の結晶で、のびのびと描かれたり造られたりしたものが目につきます。私たち教師の目にはとても刺激になり、指導に生かせるものばかりです。ぜひご覧ください。

55 HAKODATE 2005·7·28
速報
第55回全道造形教育研究大会
函館大会 No.11

公開授業より

6年「私たち街づくりデザイナー」

西館　純（函館市立昭和小学校）
楢山　聡（教育大附属函館小学校）

二つの学校の子供たちがそれぞれの「函館」の街への思いや願いを交流し、それを形や色、ポスターとしてあらわしていく授業でした。それぞれの思いを十分に話し合う機会は少なかったはずですが、二つの学校という違いを感じさせないぐらいうち解けて活動していました。また、それぞれ違った色や形への感じ方を素直に話し合い、認め合っていく姿は、図工教育の中でも、大切なものだということを改めて感じさせられました。
（鹿部小　佐郷谷　滋）

公開授業より

5年「函館・元町・スローアーカイブス」

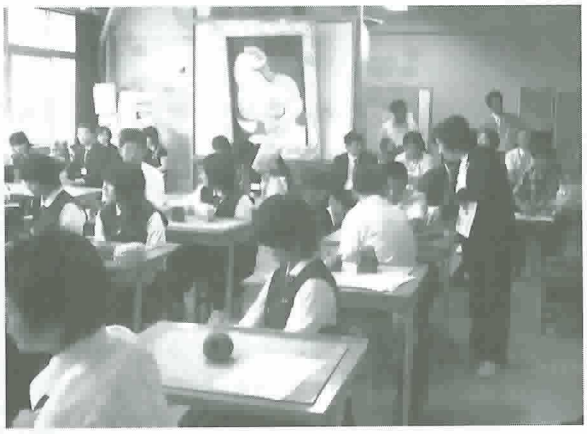
山田　光（函館市立旭岡小学校）

「図工を超えている」それが第一印象でいた。
分科会名「くらしからのいざない」から身の回りにあるものを利用し、何か作品をつくるのだろうと予想して来ました。が、授業を観ると「街を使い街を表現する」という、作品≒作品の世界が展開されていました。材料が材料のまま終わっていないのです。「どんな街にも応用が利く」「図工以外（総合・社会など）へも広げることができる」という点に感動しました。
（釧路・昭和小　本間由夏）

55 HAKODATE 2005·7·28
速報
第５５回全道造形教育研究大会
函館大会 No. 12

公開授業より

中２　くらしからのいざない ～縄文の灯～　九千房政光

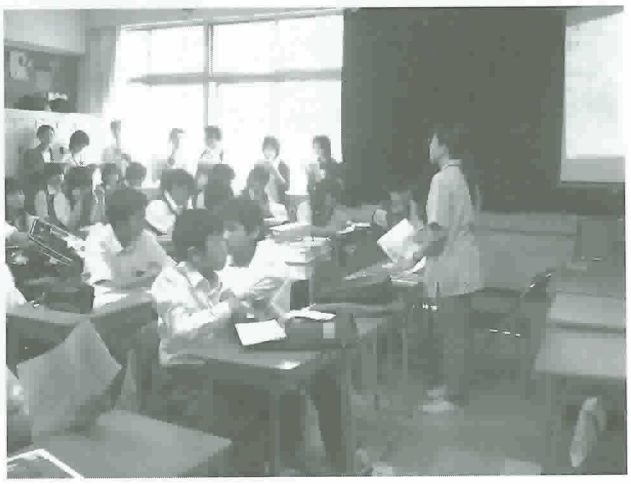


夏休み中にもかかわらず、公開授業に参加してくれた２０名の生徒たち。やや緊張の面持ちで授業前の打ち合わせをしていました。その緊張をとぎほぐしながら、授業にのぞむ九千房先生は、函館東部地域に見られる縄文土器を鑑賞させながら、生徒一人ひとりの製作した土器に灯をともしました。新たな感動が教室を包み込みます。学習活動に入ると、生徒たちはいつもの表情がもどり、自分の作品への思いを生き生きと発表しました。「先生、声うらがえさないでね！」先生と素直な生徒たちの日ごろの信頼関係がほほえましく感じられる雰囲気です。（参観された先生方４２名）

中３　ものからのいざない ～なまら函館ＰＲ大作戦～　佐々木壮一

子どもたちはよくアニメーション作りに興味を持って取り組んでいた。中には苦手な子どももいるようですが、とても意欲的に全員が取り組んでいました。最後に全員の作品をつなげてみたのですが、学級の雰囲気や学級経営などがよくわかり、とてもよい授業でした。

中２　ひとからのいざない ～田辺三重松に学ぶ～　斎藤悦子



ゲストティーチャーの生の声に目を輝かせる生徒の姿を見て、あらためて、心の中にある感性のゆさぶり方、教える側の工夫を考えさせられました。鑑賞教材ということで難しい面もあったと思いますが、お疲れ様でした。（戸倉中　笠松英治先生）

55 HAKODATE 2005・7・28
速報
第５５回全道造形教育研究大会
函館大会 No.13

公開授業より

4年「光と風のハーモニー　～またたく光で夜をかざろう～」

水島 賢久（函館市立駒場小学校）

函館の夜景にちなんで、自分たちで考えたランタンを紙コップ、豆電球を使って創作する内容でした。一人一人の児童が思い思いに工夫を凝らし、楽しそうに活動していました。函館の夜景から連想する光の見え方が随所にあって、幻想的でもありました。明るさやきれいさ、見え方の工夫を確かめるために箱のブースを用意するなど児童の立場に立った工夫も随所に観られました。

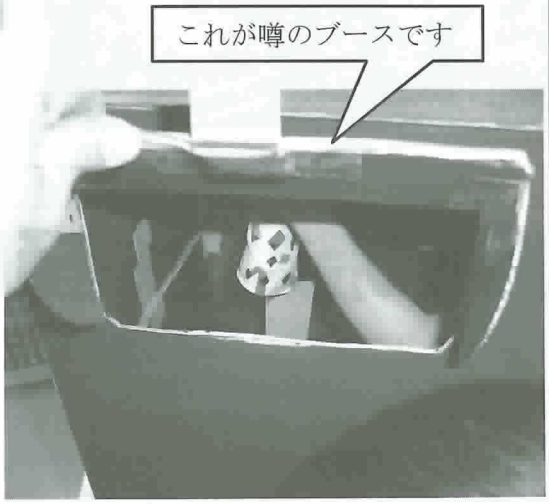
函館・千代ヶ岱小学校　佐々木寿也

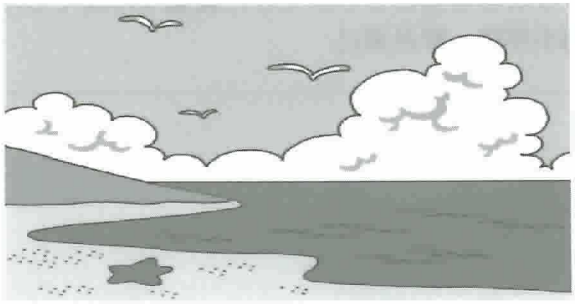
「ついた！」

小さな暗室の中に頭を入れて、うれしそうに叫んでいる楽しそうな姿がたくさん見られました。

難しそうな装置を一人一人、きちんとつくったこと、他の人と違う自慢の作品ができあがったことがすばらしいなぁと思いました。

函館・港小学校　三品　充子





55 HAKODATE 2005·7·28
速報
第５５回全道造形教育研究大会
函館大会 No.14

公開授業より

幼稚園　ひと・ものからのいざない

～うみだ！うみだ！～　小林恵理子　中山利広　太田洋子

まずは授業者の先生方のご努力に感謝の思いでいっぱいです。

前日は雨天のため、グラウンドに設定していた環境づくりの作品を、園の中に運び込んでいました。グラウンドも水たまり状態でした。

しかし、晴天の強力な神様がついているせいか、当日の朝は晴れ。７時頃より（それより前から？）グラウンドに作品を運び、環境づくりを先生方みんなでしていました。お疲れ様でした。

９時より、公開保育開始です。赤、黄、青色の帽子をかぶった８６名の園児たちが、自由に、自分の好きな遊びを始めました。おどろいたことに９時より３０分がたっても園児たちの活動はとぎれることがありません。「おもしろい？」と聞きますと、「おもしろいよ。」と笑顔が返ってきます。とっても楽しそうな笑顔が、声が、あちこちで見られ、聞こえてきました。頭も、手も、耳も、眼も、たっぷり動かして遊んでいました。

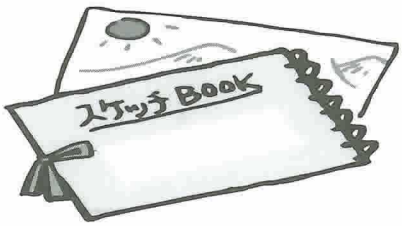
（北昭和小　高橋喜子先生）

小学校の授業　全体を通して

小学校の３つの学年の授業を参観させてもらいました。３つの活動とも函館という題材のもと、それぞれことなった表現活動が行われており、とてもおもしろい授業だったと思います。

私が特におもしろい活動だなと思ったものは、５年生の「函館・元町・スローアーカイブス」の中のこすり出しの表現方法です。マンホールなどをこすり出すという活動は、子供たちにとって驚きのある活動だなと思いました。図画工作の授業の経験の少ない私にとって、表現活動にはいろいろな方法があるということを知ることができた貴重な時間でした。ありがとうございました。

函館・南本通小学校　野呂勇己



55 HAKODATE 2005·7·28
速報
第５５回全道造形教育研究大会
函館大会 No. 15

開会式より

「わーっ！」

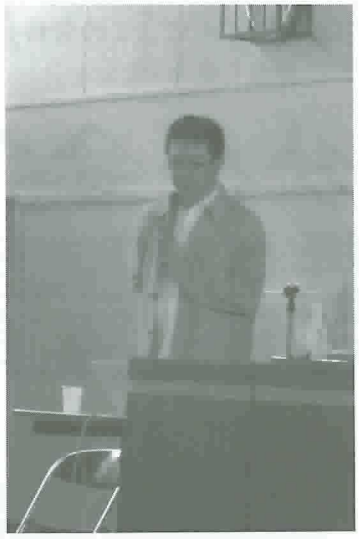
STARWARS のテーマに乗って函館夜景の点灯で幕を開けた開会式！　趣向を凝らしたオープニングは函館大会ならではです。

主催者の挨拶「今裕子大会長、藤川実行委員長」のお話に続き、ご来賓として、会場校長冨田校長先生、渡島教育局長　西村　守　様、函館市教委教育長　金山　正智　様のご祝辞を賜りました。

研究概要を北海道造形連盟研究部長　川島先生、函館大会研究部長　柿崎先生がプレゼンテーションし、わかりやすく視覚に訴えて説明してくださいました

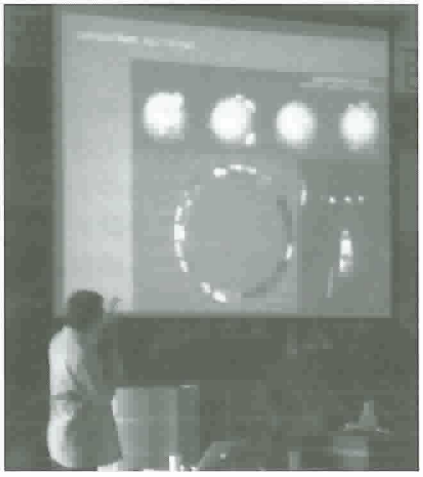
湯川中　仲井先生作「函館の夜景」
スターウォーズのテーマと共に点灯！

記念講演より



「普段感じられないものを、感じられるものにする」というのが情報デザインであると説明され、１０年前に関わられた「センソリウム」で具体的に紹介された内容は非常に興味深く聞くことができました。この情報デザインは、けっして専門家の専有物ではなく、普段私たちが生活する中に存在することということにも驚きでした。

教育との関わりという視点での、「ふでばこ展覧会」や「教育番組のピタゴラスイッチ」の紹介なども、一視聴者としてとても参考になるものでした。



また、この情報デザインを成功させる視点としてコミュニティというものを基盤とした取り組みが大事である点など学校教育における取り組みなどにも可能性を感じさせました。

後半に紹介された実際に函館で取り組まれた「ハコダテスミカプロジェクト」や「ハコデジアート探検隊」などは、ビジュアル・シンキングという理論的な裏付けもさることながら、造形教育との関連も含め、今後の実践に可能性を感じさせるものでした。（詳しくは大会研究紀要を参考にしてください）

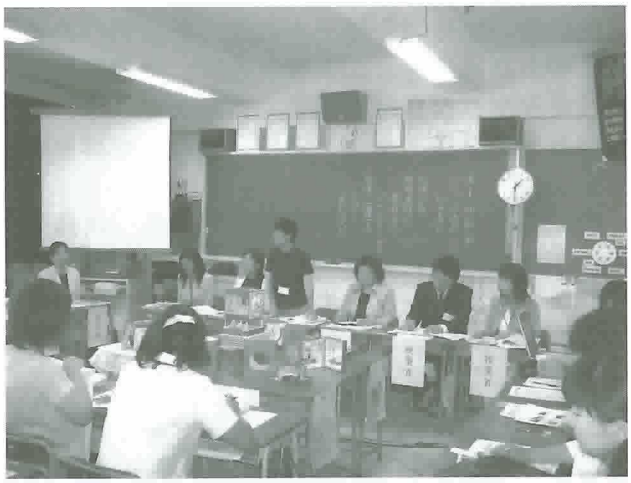
55 HAKODATE 2005·7·28
速報
第５５回全道造形教育研究大会
函館大会 No.16

分科会討議より

第１分科会「ひと・ものからのいざない」

提言者
山形　弘枝（函館市立金堀小学校）
尾形　旬美（函館市立はこだて幼稚園）

討議の柱
・地域素材の教材化はどうあるべきか
・感性、個性を以下に育むべきか



本日の公開保育を通して柱に沿って話し合いが進みました。小学校の先生からの子どもの姿に対する素朴なご意見から、幼児の素材の扱い方や発想の豊かさ等へ話が広がっていきました。
「造形」ということで、イメージをため込む体験ができる環境構成をすることが子どもの感性を育むことにつながるなどの話が深まっていきました。
小学校の先生から話が出て幼稚園の先生方が答えていく中に、この分科会ならではの「よさ」を感じました。

分科会討議より

第２分科会「ひとからのいざない」

提言者
中谷　文武（函館市立鍛神小学校）
新保　理奈（別海町立別海中央小学校）

討議の柱
・子どもたち一人一人の感性、個性を育むために、どのように人・地域から教材化していくか

参加人数は少々少なめでしたが、二つの学校の交流授業という取り組みの中、広い視野で物事をとらえることができたのではないかと話されていました。
また、子ども一人一人が思いを持って持ち寄ったものをグループで吟味することが感性を高めることにつながるのかどうかについては、お互いの作品を認め合うだけではなく、話し合うことも感性をのばすことにつながると話が出ていました。
少ないながらも熱気ある活発な論議が、休憩時間以後提言の内容についても期待できます。

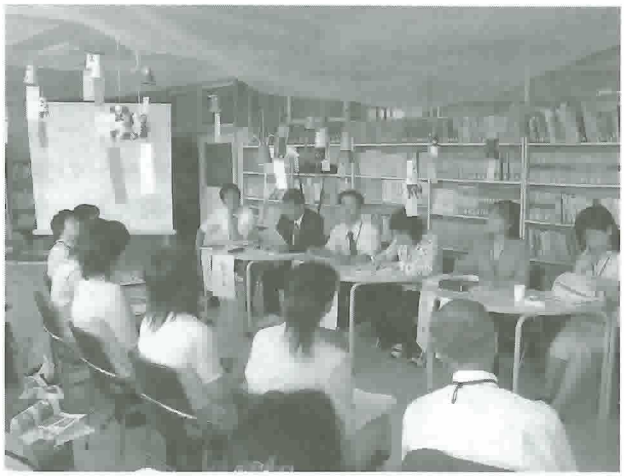
55 HAKODATE 2005·7·28
速報
第５５回全道造形教育研究大会
函館大会 No.17

分科会討議より

第３分科会「ものからのいざない」

提言者 小笠原博子（森町立尾白内小学校）
福島由紀子（札幌市立澄川西小学校）

討議の柱
・感性、個性を育むための地域素材の教材化のあり方



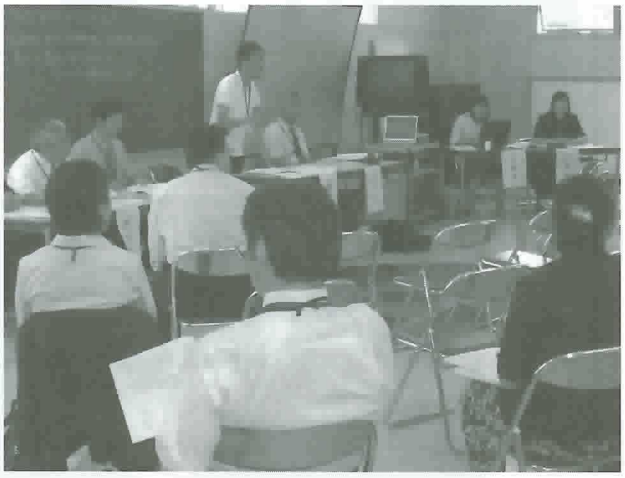
授業者からは、材料の選び方、工作の工夫などに課題があったと思われるということ、また、紙コップは安価でこわれにくく加工や応用が聞き取りくみやすいものであったという話があった。
会場の先生たちからは子どもの主体的な動きを尊重しながらも雰囲気作りを気にかけ生き生き活動させることができたのではないかということや、「おためしボックス」の設置など随所に生徒同士の関わり合いを重視した組み立てがわかるなど、和やかな中にも熱心な話が続いています。

分科会討議より

第４分科会「くらしからのいざない」

提言者 井田　昌之（大成町立平田内小学校）
佐伯　晶宣（江別市立江別第三小学校）

討議の柱
・地域素材を生かした教材化により、感性をゆさぶり子どもの変容を促すためにはどのような指導法がよいか



アーカイブや写真・絵・こすり出しという技法を複合してダイナミックに創作することで図工美術の新しい可能性を提起した授業であったとの話が参加者から出ていた。地域に対しての調べ学習や野外学習を伴うため、総合学習の差異について意見も出たが造形教育の時数削減の中、他教科との関連からの新しい図工の方向性も指摘されるなど、先進的な取り組みであるとの話もあり、今後の発展に期待が集まる話し合いがもたれている。参加者は８名程度と少ないが、日頃の遊びや活動の中から作品に対する愛着が育つことが総合学習との大きな差であるとの話もあって、熱気ある話し合いになっています。

55 HAKODATE 2005·7·28
速報
第55回全道造形教育研究大会
函館大会 No. 18

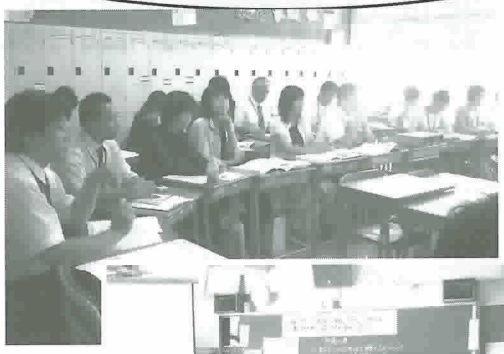
中学校　分科会より

第5分科会　～ひとからのいざない～

提言者 庄子 勝弘（旭川市立春光台中） 宮崎紀子（教育大釧路校）

討議の柱
○身近な人を取り込む授業の工夫。
○想いを引き出す授業展開。

授業についての話し合い
授業者から、
田辺三重松のことは、自分自身あまりくわしくなかった。今回時代の流れで絵が変わったり、絵の背景を子どもたちとともに知ることができた。一人ひとりの時代背景を知るゲストティーチャーの登場（田辺さんと直接かかわった方の話を聞く）、今までの鑑賞の時間にはしたとのない試みをした。受動から自分たちで調べるところへ・・・というはなしがあった。
意見や感想として、
総合的学習や道徳の部分も見えて、非常によかった。ゲストティーチャーの登場は心に残ったと思う。班でしっかり調べ活動・発表ができていたことに驚いた。などが出された。

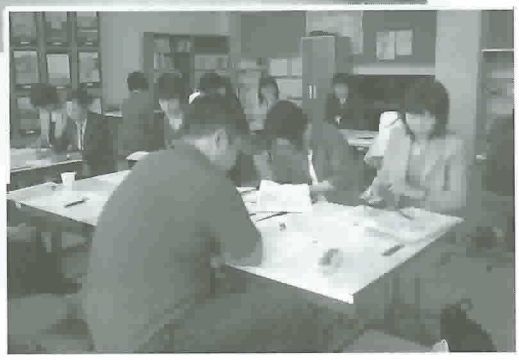


第6分科会　～ものからのいざない～

提言者 後藤征秀（知内町立知内中） 鎌田俊博（旭川市立江陵中）

討議の柱
○地域素材をどのように生かしているか。
○個性を生かした授業の工夫。

提言者から、コンピューターの手軽さのよさを生かし、手軽さゆえの安直な制作にならないよう、アイディアをしっかりこねさせることによって避けるよう工夫していた。アニメの特性として、展開のよさを出すように工夫させた。と話があった。話題は地域素材を自分たちの生の感覚でとらえさせることの重要さ、インターネットの利用の良し悪しにもっぱら集中した。
また、地域素材、身近でよく知っているもの、又は身近すぎて見過ごしているものを、どのようにとらえるかも大切という指摘もあった。教師側からの概念をくずし、ありきたりな発想をくずし、展開させることが大切である。という意見も出された。
子どもたちが函館をＰＲしたい、函館に愛を再認識した様子がわかったという意見もあり、６時間扱いの授業として大変に質の高いものになっていた。



55 HAKODATE 2005·7·28
速報
第55回全道造形教育研究大会
函館大会 No.19

中学校　分科会より

第7分科会　～くらしからのいざない～

提唱者　三浦 薫（函館東高等学校）　玉造 至（美唄市立光中）

討議の柱
○地域空間を生かした造形活動と自己表現について。
○中・高の現状や連携について。

今大会のテーマに沿って、地域とのかかわりを考えてみた授業でした。銭亀沢は実際に縄文土器が出土する土地で、実際に学校付近の土地を調べ、生徒とともに土を掘り、形を作り、焼成（野焼き）をしてみました。縄文土器を作るのではなく、縄文の人になったつもりで、楽しく、飾れる・使えるものをイメージさせ作らせました。

討議では、先生の授業に対する真剣さや正直さがあらわれる授業であった。テーマに対する取り組み、実際にロウソクをともしてみて、初めてわかる感動など、生徒も生き生きと活動していた。地域の素材を生かしたとてもユニークな授業であった。粘土の制作という技術的なもの以上に、イメージ・想像力をふくらませるのがすばらしい。などの意見が出されました。

全道造形教育ネットワーク会議　より

北海道造形連盟の重点にネットワークの充実があげられ、年２回ネットワーク会議が行われるようになりました。４月の地区委員総会前のネットワーク会議は、９支部２０名の参加がありました。ネットワーク会議は、他の分科会とちがい、現場レベルの横のつながりを大切にしていきます。

今回は、函館の柿崎先生、札幌の向井先生、釧路の中島先生が提言をしてくださいました。また、日常的な交流を深めるため、連盟ホームページの充実を全道のネットワーク担当者でがんばっていきます。
期待していてください。

55 HAKODATE 2005·7·28
速報
第55回全道造形教育研究大会
函館大会 No.20

参加者のみなさん ありがとうございました

事務局長　横岸澤　英二

第55回全道造形教育研究大会函館大会が盛会のうちに終了することができましたことに心よりお礼申し上げます。

本大会は、連盟研究主題「心豊かに未来に生きる造形教育」を受けて、前回の函館大会から地域に目を向け取組んできました。大会テーマであるめざめる感性（こころ）きらめく個性（かたち）に迫るため、もう一度わたしたちの地域空間を〈ひと〉〈もの〉〈くらし〉の３つの視点からとらえ直し、造形活動の可能性を探る大会でありました。

めまぐるしく変化する社会の中で、私たちは時には立ち止まり、ゆっくりと、ゆるやかに、風のにおいや音、街並みの色や形、人とのふれ合いなど、地域空間がいざなうスローな時間を共有し、感じる心を育てたいと願っています。

公開に先立って行われた「ハコデジアート探検隊」によるアートプロジェクトの試み、テーマをもって見る色や形の再発見。公開された授業・提言では、地域空間からのいざないに、積極的に関わることによって生まれてくる新たな創造力、自然の力がもつ優しさなど、子どもたちの心を育む造形活動のヒントがたくさん隠されているように思いました。本大会で得た貴重なご意見をさらに日々の実践に生かしていきたいと思います。

最後になりましたが、本大会へのご支援をいただきました各関係機関、ご参会いただきました多くの皆様に感謝申し上げるとともに、次期開催地、札幌でお会できることを楽しみに終わりのご挨拶といたします。

INFORMETION 大会実行委員会からのご案内

レセプションにて更に交流を

函館の老舗「五島軒本店」の料理を肴に本日の成果を更に確認し、次年度札幌大会につなげる会としたいものです。皆様方のご参加を実行委員一同、心よりお待ちしております。
シャトルバスも中学校会場前より用意しておりますので、ご利用ください。

身近な美しさへの気づきを求める
函館大会
から
確かな表現を実感する
札幌大会
へ

来年またお会いしたいです！

感受性や創造力育成へ

道造形教育連盟が研究大会

【函館発】第五十五回全道造形教育研究大会が七月二十八日、道教育大附属函館中学校ほかで開かれた＝写真＝。公開授業や記念講演を通して、研究主題「地域空間をいざなう造形活動のひろがり」の成果を発信。全道から約三百人が参加し、子どもの美的感受性や発想・構想力、創造力の発展を目指す造形教育の大切さを確認した。主催は道造形教育連盟、函館市美術教育研究会。

子どもたちを真っすぐ見て

大会テーマを「めざめる感性（こころ）きらめく個性（かたち）」に設定。子どもたちに何らかの造形的な刺激を与えていくことによって、自分自身の良さに気付き、心の扉を開き、いろいろな事象にかかわっていくことを目指してきた。これを踏まえ、子ども相互の活動や表現の良さ・個性を認め合うことで互いの感性が研ぎ澄まされ、個性のきらめきにつながるものと考えた。

また、「地域空間をいざなう造形活動のひろがり」を研究主題とし、道南・函館という地域空間に目を向け、表現や造形活動を地域とともに掘り起こし見直すこととした。子どもや教師が地域に存在する空間、場所、人材、施設、文化、風土などと深くかかわり、それらを題材として効果的に活用することによって、表現や鑑賞の活動をより豊かなものとしていくことができる。そこで、地域空間を「ひと・もの・くらし」という三つの視点からとらえ、子どもの美的感受性や発想・構想力や創造力を育み、個性に応じた豊かな造形活動を展開した。

開会に先立ち函館市内の幼稚園から中学校まで七クラスの公開保育・公開授業を実施し、研究の成果を披露した。

開会式では道造形教育連盟委員長の今裕子氏、函館大会実行委員長の藤川潔氏、道教育大附属函館中学校長の冨田幸雄氏があいさつ。うち今氏は造形教育に求められている課題に真正面から取り組み、情熱に溢れる先生方に敬意を表し、「子どもたちを真っすぐに見てほしい。本大会で各地区の実践交流ふまえ、造形教育の素晴らしさを確かめ合おう」と求めた。

また、藤川氏は美術の時数削減や会員の減少にふれ、「造形教育は豊かな情操を培う人間の根幹である。自分の住む地域の良さに気付き成長する子どもは自分の地域を大切にする人に育つ。造形教育が地域を見詰め直し社会へ発信する機会となる」と期待を寄せた。

渡島教育局長の西村守氏と函館市教委学校教育部長の見澤敏弘氏による祝詞に続き、道造形教育連盟研究部長の川島正夫氏と函館大会研究部長の柿崎雄二氏が研究概要を説明した。

引き続き、「発見と共創の学びをデザインする～情報デザインが媒介する造形教育と地域コミュニティ」と題して智財創造ラボ主任研究員、NPO法人ヒューマン・センター・デザイン・イニシアティブ理事の渡辺保史氏が講演した。

渡辺氏は日常生活の中にある情報デザインや手がけたプロジェクトについて報告した。六月に行ったハコデジアート探検隊では市内の小中学生がデジタルカメラを手に、顔に見えるものや夏を感じるものを探求。普段見過ごしてしまうもの一つ一つに注目し、シャッターを切っていった。最後にカメラに納めたものを加工したり、切り抜いたりして個性が光るコラージュを作成した。

その作品を公開し、「子どもたちは新しい発見が多いと話していた。見えているものを再認識することは芸術の本質である」と活動の成果を述べた。「世代や人々をつなぎ合わせることで一人ひとりが人間としての個性を尊重し合い、創造力を発揮できる。そこから次世代の社会がデザインされる」と地域空間における「ひと・もの・くらし」の視点の大切さを語った。

アニメで函館ＰＲ

函館的場中３年美術

独自にストーリーも設定

第五十五回全道造形教育研究大会の公開保育・公開授業が七月二十八日、教育大学附属函館中学校と函館小学校で開かれた。函館市内の幼稚園、小学校、中学校の七クラスが「地域空間がいざなう造形活動のひろがり」についての実践を公開。うち、函館市立的場中学校三年の「なまら函館ＰＲ大作戦」では、生徒一人ひとりがアニメーションソフトを使い、それぞれ独自の視点で函館を紹介した＝写真＝。

「ものからのいざない」分科会のうち美術科「なまら函館ＰＲ大作戦」では函館市立的場中の佐々木壮一教諭が指導に当たった。これまで函館の歴史や特産品などについて調べたりアニメーションソフトの特性を理解した上で、独自に函館の魅力を伝えるストーリー構成でアニメーションを作成してきた。今回の授業が六時間展開の最後の発表会となる。

授業ではまず、五、六人ずつのグループに分かれ、グループ内でそれぞれの作品を「テーマに沿ったストーリー展開か、字やイラストが見やすいか、タイミングや時間設定はどうか」の観点から評価しあった。

次いでグループの代表者一人ひとりの作品をスクリーンで披露。函館山の夜景をテーマにロープウェイで登る場面や夜景のイラストと写真を重ねるなどの工夫した作品や、函館の人気店レストラン・ラッキーピエロの紹介、イカ踊りの動きなどそれぞれの個性が輝いた。

佐々木教諭がスクリーンで生徒全員の作品を音楽にのせて連続再生した光景に生徒たちは盛り上がった。最後に生徒同士が評価し合い、「一人ひとり違う個性があって面白かった」「みんな函館が好きなんだなと思った」などの感想を書いていた。

北海道通信
平成17年７月28日

公開保育で楽しく遊びまわる園児たち

北海道新聞 平成17年7月29日

造形遊具で子供に豊かな心を

函館で公開授業

全道教育研究大会

造形活動を通じ、豊かな心をはぐくむ教育を考える全道造形教育研究大会函館大会が二十八日、函館市美原の道教大付属函館中学校などを会場に開かれた。

北海道造形教育連盟と函館市美術教育研究会の主催で五十五回目。道内外の教育関係者ら約三百人が参加した。

今回のテーマは「めざめる感性（こころ）きらめく個性（かたち）」。地域空間を「ひと・もの・くらし」の三点からとらえ直し、造形活動につなげる狙い。幼稚園、小学校、中学校の三会場に分かれて公開授業と分科会が開かれた。

幼稚園グラウンドでの公開保育で園児たちは、赤いポリ袋に新聞紙を詰めて事前に作った小さなタコを、かごの中に投げ入れて遊ぶゲームに熱中。見学した教員は、子供の伸び伸びした様子を見ながら、メモを取った。

また、函館在住で情報デザインに詳しい渡辺保史さんが「発見と共創の学びをデザインする」と題して講演した。

（菊地信一郎）

函館新聞 平成17年7月31日

美術の在り方探る

全道造形教育研究大会

教諭ら300人参加

子どもたちの造形活動心を育てる研究を進める「第55回全道造形教育研究大会」（今裕子大会長）が28日、道教大附属函館中学校をメーン会場に開かれた。全道の美術教員ら約300人が参加。市内の幼稚園、小中学校で公開授業や講演、分科会を行い、美術教育の在り方に理解を深めた。

各会場では、子供たちが地域の特性を活用して……美術教員らが美術教育の在り方に理解を深めた全道造形教育研究大会（道教大附属函館幼稚園で）

取り組んだ造形活動の研究結果が紹介された。函館をはじめ道南の地域空間に目を向けた表現からは、自分たちの地域を掘り起こし、見直そうとする姿が感じられた。

このうち、道教大附属函館幼稚園では「海」をテーマに、園児がグラウンドを海に見立て、海中の様子を表現した内容が発表され、参加者の関心を引き付けた。

園児は新聞紙とビニール袋を使い、大きなクジラやタコを作ったほか、袋に新聞紙を詰めた魚を並べた。遊具の土管を潜水艦として利用、中から見るグラウンドは海中の様子そのもの。

参加した教員たちは、子どもたちの生き生きと活動する姿を見たり、作品を楽しんだりし、有意義な大会としていた。

函館での開催は、5年ぶり7回目。

（笠原郁実）

協賛をいただいた皆様

石井　久
石原　佑一
繪面　和子
大崎　義弘
加藤　彬
角谷　聖子
金谷　彊
木村　貴
九十　勝子
越田　喜忠
近藤　貢
佐藤　良紀
菅原　昭一
滝本　幸也
武田　誠
田中　俊也
手代木　惇
乳井　邦衛
千葉　利子
信永　昭三
長谷川　久子
橋本　紀勝
福田　隆次
本川　陽子
安井　孝
山谷　礼司
若竹　隆邦

（五十音順，敬称略）

編集後記

日ごとに寒さが身にしみる季節となりました。連日の暑さの中，台風の接近を心配しながらの会場準備と晴天に恵まれた大会当日からあっという間に４ヶ月が過ぎました。

第５５回全道造形教育研究大会函館大会は「めざめる感性（こころ）きらめく個性（かたち）」をテーマに「地域空間がいざなう造形活動のひろがり」を研究主題として，教育の今日的な課題と関連づけながら新しい造形教育のあり方を探る大会でありました。幼稚園，小学校，中学校，高等学校，養護学校と校種の枠を超え，７つの分科会において７つの授業，１４の提言を公開，地域空間を造形素材として「ひと・もの・くらし」の３つの視点でとらえ，感性を育み，個性に応じた造形活動を展開し，全道に向けて発信しました。参加いただきました皆様から多くの貴重なご意見とご示唆をいただくとともに，多大なるご支援のもと，成功裡に終了できましたことを大変嬉しく思います。今後も，得られた成果と課題を生かし，造形教育の発展のため日々実践を継続していきたいと思います。

最後になりましたが，本研究大会の開催にあたり，ご協力をいただきました皆様に心よりお礼申しあげます。

編集委員

藤　川　　潔（函館市立日吉が丘小学校）
横岸澤　英　二（函館市立本通中学校）
瀧　本　伸　幸（函館市立日吉が丘小学校）
柿　崎　雄　二（函館市立昭和小学校）
木　村　伸　仁（函館市立旭岡中学校）
佐々木　善　憲（上磯町立浜分小学校）

第５５回　全道造形教育研究大会
［函館大会］大会集録

発行者　大会実行委員長　藤　川　　潔
編　集　大会集録編集委員会
発行日　２００５年１２月
印刷所　株式会社　長門出版社印刷部
〒０４０―００２２
函館市日乃出町１１番１３号
（０１３８）５２―２４６１